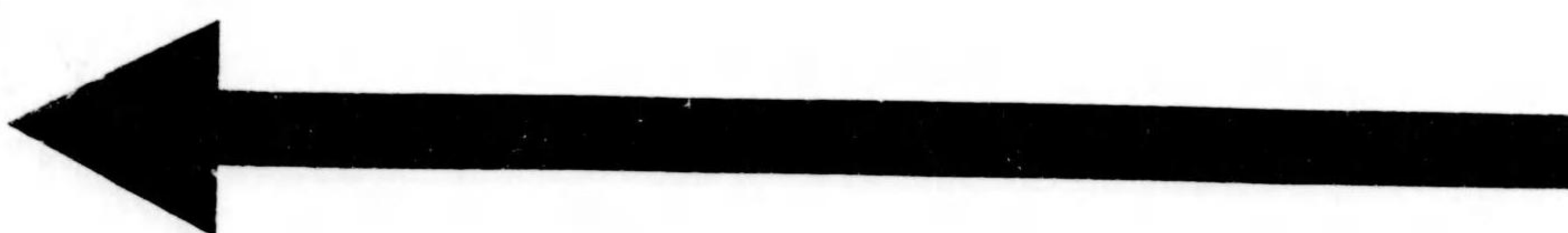


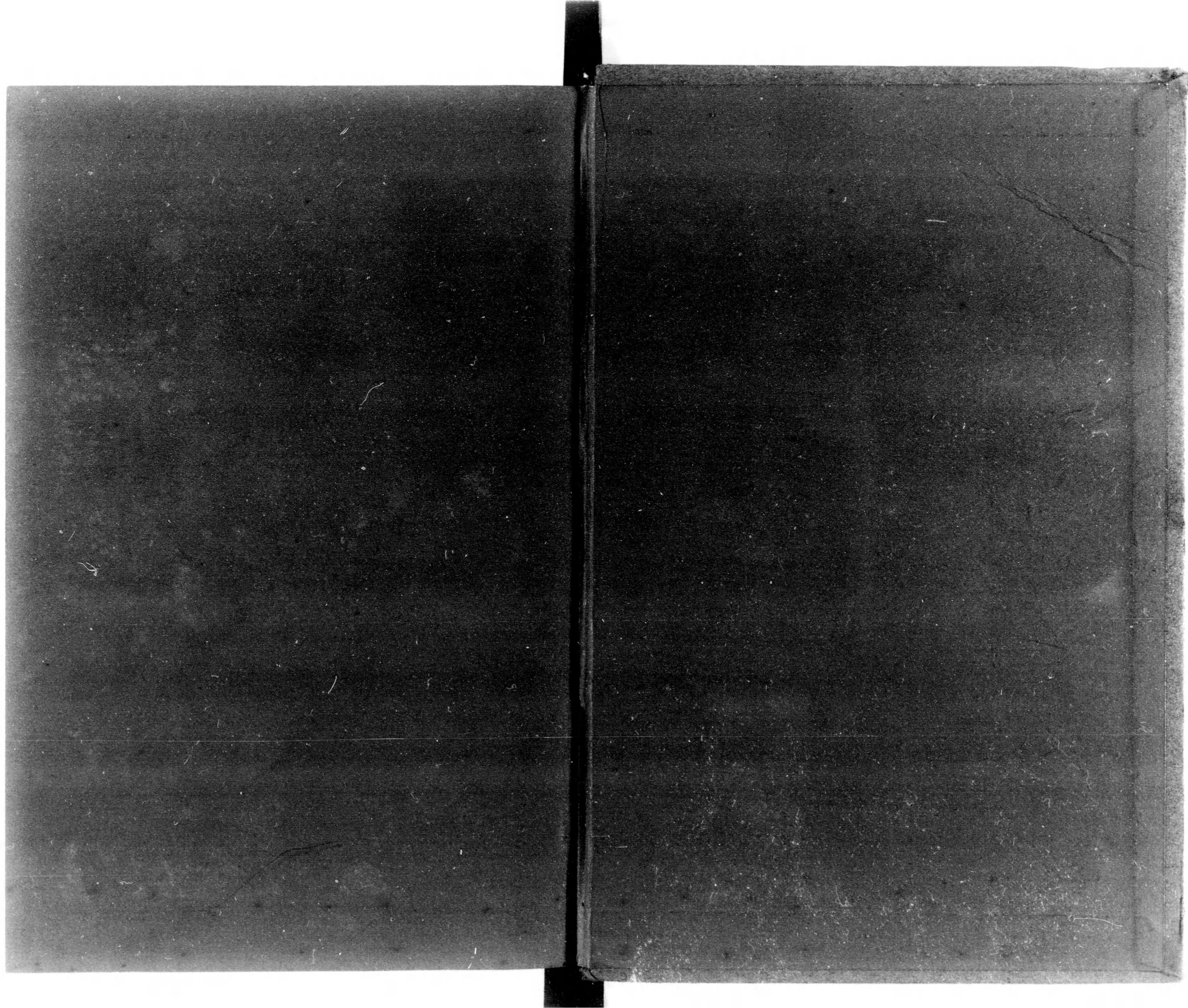
始





白 痴  
來 明 你







未  
明  
作

大正  
2. 3. 14  
内交



附  
註



特102  
404

## 序

充たされない欲望の悩み、思ひ切れない執着の苦しみは、いつの時代にも止むことのない人間の悲哀である。けれども近代の文學が吾々の前に展開するさまじくの煩惱執着の中には、血管と神経との末梢の、恐ろしいほどに鋭く細やかに顫動する有様をまざりと見る。そして、吾々は今更に人間生活の神秘的な奥底へ誘ひ込まれて行く。魂の眞洞から吹く冷たい風が、吾々の身に泌み心を戦かす。それでも人は、その戦慄と恐怖と不安とを貪り得ることを、寧ろ幸福に感じてゐる。そこに生命の緊張を感じてゐる。

不思議な形や色に對する初期のロマンティックな恐怖や不安は、

大正  
2. 3

内交

魂の戦慄を貪ることによつて生命の緊張を感じる奇異なる欲望とは、自のづから別である。魂の戦慄を貪る人の心には、何ごともあまりに不思議でなく、あまりにありふれたことであるが故に、その不思議ならぬありふれたことそのものが、直ちに不安と恐怖とを生み出すのである。不可思議に對する不安ではなくして、可思議に對する不安とも謂はうか。いや實に、一層深い廣い不可思議の存在に戦慄する不安である。可思議の中に隠顯して、これを圍繞し周匠してゐる大いなる不安である。不可思議を捕捉し指摘することの出来ない爲めに生ずる、あやかしのやうな不安である。この不安と恐怖と寂寞とは、生活の全面に浮動し搖曳してゐる、薄い眼に見えない翳である。たとひ眼には見えても、これを眼底に拂拭し去ることの

出来ない翳である。白日の恐怖である。眼に見えぬ黒い鳥は、明るい白日の空に、薄い翳を投げて飛ぶ。けれどもその音なき羽搏きの音は、閃めきのやうに神経を打つて慄はす。白日の空に眼に見えぬ黒い鳥を追ひ、音なき羽搏きの音を聴かうとするのは、太陽の光りの中に斑點を見ずには居られぬ心である。もとより恐怖と不安とを貪る欲望である。そしてまた、一種の生命の抵抗である。

白日の空に羽うつ黒い鳥の羽音は聞こえず、その翼の影の翳さへ、捉へんとして捉へがたい、あやかしの翳である。しかし黒い鳥は、常に白日の空に眼に見えぬあやかしの影をくもらしてゐる。太陽の光りの中の斑點も、人間の肉眼では見ることが出来ない。しかし音もなく影もなく、極めて玄微なる刻々に、灼熱の太陽の面は暗

く燃えてゐる。吾々の生命の源である太陽にも、生命の不斷の消滅があるのだ。一切のものゝ生命は、音もなく影もない白日の沈黙のうち、永却の壊滅に歸して行く。灰の塔の崩れ落ちるやうに、冷たい響きのない破壊が、刻々に成し就げられて行く。一切のもの一つとして、この冷たい響きのない破壊の力を暗示し前兆せぬものはない。無限の欲望と執着との心を懷いて、不滅の生命を憧れ求めれば求めるほど、尙更あやかしの翳は拂ひ去りがたく、壊滅の暗示は頻りに心を射て曇らす。壊滅の力、白日の黒い鳥、凡て捉へがたい沈黙の力であるから、強き抵抗によつてその不安を拂拭し絶滅することは出来ない。これを拂拭しこれに抵抗しようとするほど、益々不安に誘はれて行く。不安の影を捉へようとするほど、

その影を追うて行かねばならぬ。その不安を追ひ貪ることが、即ち生命の強き抵抗である。生命の緊張である。あやかしの翳は、果てしなく人の心を不安に誘ひ、人は誘はれつゝも不思議な執着に生きて行く。生命の誘惑の奇異なる深い力である。

小川未明君に就いて私の感ずることの中で、最も強く私の心を牽くのは、このあやかしの翳の誘惑に生きつゝある君の心持ちである。そこに君が現實の生活に對する執着も欲望も、絶望も悲哀も、また生命の抵抗も主張も籠つてゐると思ふ。しかも、この不安と恐怖とに充ちた君の心持ちの翳圍氣には、一種の素朴純真な懐かしみがある。生え抜きのまゝの人間の、肉の温かみと心の潤ひとが流れてゐる。理解せられない少年の悲哀や、無智の恐怖や、無理由の憎悪や、



衷心を咬む嗚咽や、強猛な忿恚や、凡て原始的本能的な、野性の多い人間の煩惱と執着とが、粉飾なく露呈せられてゐる。そこに原始的な神秘の恐怖と、原始的な純真素朴の情とが一つになつて、君の特殊の生命を形づくつてゐる。壊滅の力に戦慄する心、白日に黒い鳥を追ふ心、その心の中には、生命の源を信愛し、それに信順せうとする醇なる小兒の心が動いてゐる。やゝ言葉を強くして言へば、一種の豊かな、自由な、幸福な、無垢の感情が、不安と恐怖との間に浮動してゐる。この原始的な純真な感情の力は、君の作品に無類の魅力を與へてゐる。君の作品を詩とするものは、實にこの醇なる小兒の心である。

フランソア・コッペエは、エルレエヌの詩集の序の中で、エルレエ

ヌのやうに生涯小兒の心を失はない詩人は幸福であると謂つてゐる。小供ほど本能的肉的で同時に神々しく醇なものはない。眞に人間の生活を生きたといふことは、最も強く本能的に生きると同時に、最も神々しく醇に生きることである。詩人の生涯は最も原始的本能的であると同時に、最も神々しく醇であらねばならぬ。眞の人間は神であると同時に獣であらねばならぬ。詩人は神であると同時に獣であらねばならぬ。これが本當に生きることであり、これが本當の強者の生活である。小兒は實に詩人と強者との象徴である。そして、神と獣とは決して全くかけ離れたものではない。純真の情を有する點に於いては神獸一如である。小川君は小兒の心を失はない詩人である。私は君が益々本能的に生き、益々醇に生きることが切望するも

の一人である。

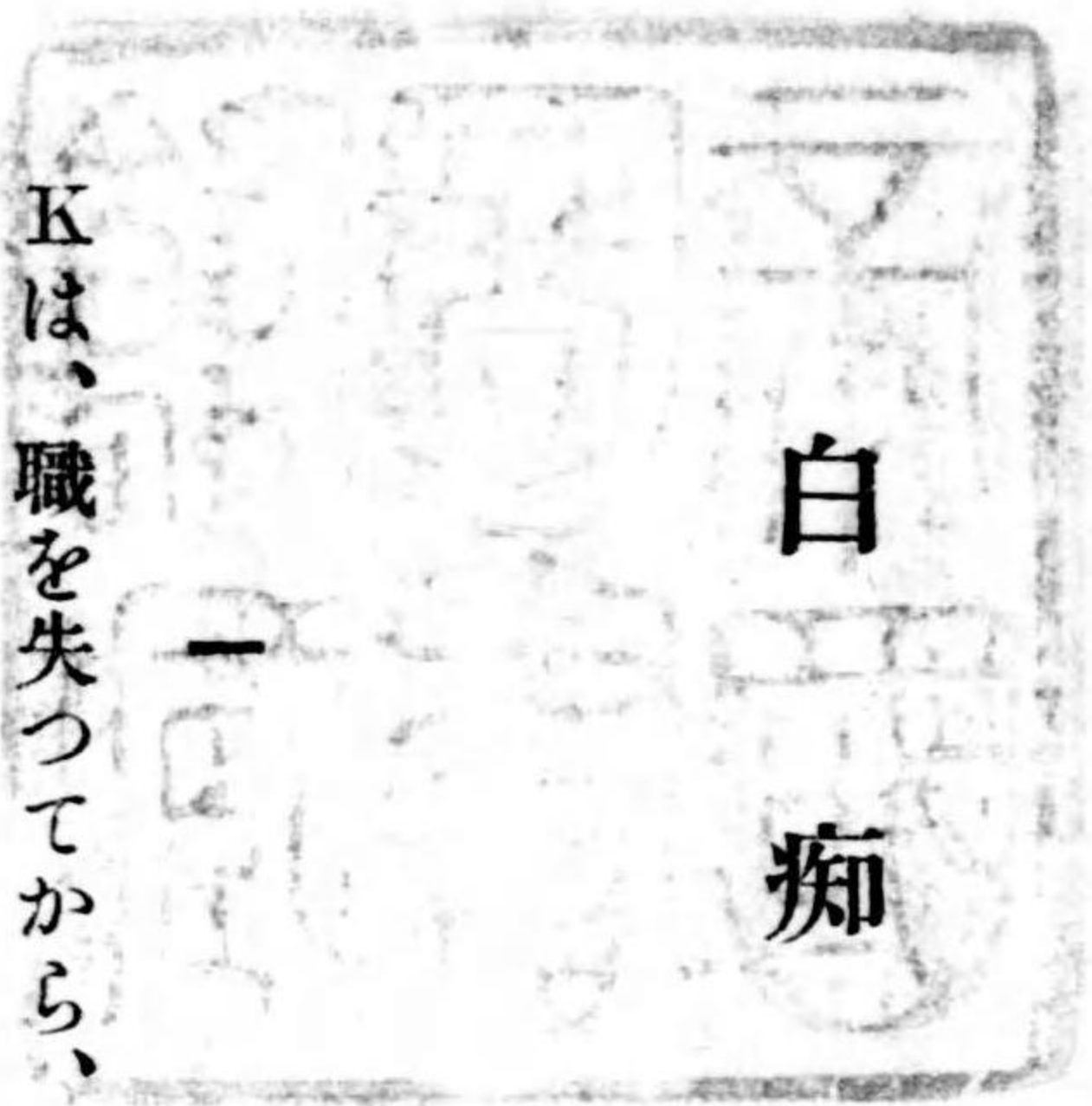
二月十一日夜

片上伸

序

次 目

都	血	は	殺	な	白
		こ		ぐ	
		や		さ	
會	塊	な	害	め	痴
		ぎ			
白	虚	暗	思	樂	孤
	偽				白
い	の				き
路	顔	夜	ひ	器	花
					咲
					く
					頃
				獨	



玉は、職を失つてから、早速生活の途に窮した。長らく居た下宿屋も、遂に彼を見限つて數月間の滞つてゐた宿料を棒消しにして立退きを迫つてから、其後は、彼は、所々方々の下宿屋を歩き廻はるやうな運命に陥つた。

この場末の成たけ知つた人と顔を合せぬやうな、もとより、前の下宿屋の人に容易に知られさうに思はれない小さな下宿屋に来てから、もう幾日か経つ

た。而して、毎日のやうに、狭い室の中に、障子を閉め切つて、疊の上に蒲團を敷かずに倒れたまゝ、眠りを貪つたのである。

其れは體が非常に疲れてゐるためであつた。暑さのためばかりでない神経の衰弱してゐた爲めである。暫らく眼を閉じてゐると、痺れるやうに、筋肉は倦怠を感じて、さながら深い溪底に引き込まれて行くやうな不快な眠りが體を襲つて來た。而して、彼は、此時自分の頸を切られても分らぬやうに、前後も知らずに眠つた。ふと心が何かの怖しい幻影に驚かされて、眼を開くことがあつても、また忽ち本能の力に打勝つことが出来なくて眼を閉ぢてしまつた。晝飯時分になつて、女中が、膳を運んで來て、障子外の縁側に膳を置いて行つた。其の音が、驕ろげながら其の意識に止まつたのであるが、直に起き上つて、飯を食べるといふ氣力もなかつたので、其儘、また幾時間となく眠つてしまつたのである。

正午過になると、太陽が西に廻つて斜めに射し込んで來た。下宿屋の庭には黄色な大きな輪りんの日まわりの花が咲いてゐる。其の花の上を越して日は縁側の上に當つてゐて、女中の置いて行つた膳が熱くなつてゐる。しばらく、蟬の啼聲がするばかりで四邊は静かであつた。二時頃、足音をばたら／＼とさして、さもだるさうな歩き付きで肥つた背の低い先刻の女中がやつて來た。晝眠でもしてゐたと見えて臉が腫れぼつたかつた。彼女は、黙つて、膳の上を見下してゐた。

まだ箸の尖が汚れてゐる様子がなかつた。女中は、ちよつと障子を細目に開けて其の間から中の様子を窺つて見た。

『よく眠る人だ。こんな眠る人はないよ。』と獨言のやうに言つて、今度は手荒く障子をピシリと音をさせて閉めた。而して、鼻唄をうたつて彼方に二歩、三步、行きかけたが、また思ひ返したやうに、立戻つて來て、縁側に置いてあ

つた膳を持つて行つてしまつた。

巴且杏のやうに爛れた日が、高い町家の蔭に落ちて、もう此の下宿屋の縁側の上に日が射さなくなつた時分になつてから、五は、漸く重苦しい眠りから眼を醒した。而して意識の不透明な頭で、天井を見上げてゐながら欠伸を二つ三つつ付けてした。室の中は、煮え返るやうに暑苦しくて、一種の悪臭ある炭酸瓦斯に満たされてゐた。彼は、やつと起き上つて衣物の前を掻き合すと、窓の際に歩み寄つて、北向きの窓の障子を開けた。

窓の前には、僅かばかりの空地があつた。略ぼ三尺ばかりで隣の垣根になつてゐた。此の垣根と窓との距離は、少しばかり體を窓から伸び出して、手を差し出したなら、垣根に指頭が届く程である。しかし其處は、常に日蔭となつてゐて、濕り氣のある地肌の色が黒い。障子を開けると共に冷かな風が何處からともなく入つて來て、心地よく彼の熱した頬に觸れた。而して、古びて、朽ち

5  
かゝつた垣根の際には、隣の方から伸び上つた、葉の細かな柘榴の樹があつて、可なり太い枝を此方に垂れてゐる。其の枝に付いてゐる無數の細かな葉が、風があつて、ちら／＼と躍つてゐる。其の葉の隙間から、みづみづしく冴えた晩方の空が透されて見えた。

彼は、しばらく、窓際に立つてこのうす緑色の空を眺めてゐた。すると、何となく、人懐しい感じが心に萌して來た。

二

五は今度は此方の縁側に出て立つてゐた。而して、忙然として何を考へることなく彼方の町の屋根の上に引つ懸つてゐるうす紅い雲を見てゐた。何となく、昨日より空が高く見えるやうな氣がして、もはや夏の裏に冷かな秋の物悲しい顔が隠れてゐるのを感じた。

やがて、十月が来るであらう。其頃になると、空の瞳は、益々澄んで、街に連つてゐる電線の上を木枯が吹いて、其の細い金屬が悲曲を奏するのである。

Kは、其の時分には、自分は、何處にどういふ生活をしてゐるだらうと考へた。

彼は、こんな空想に耽つてゐるうちに、空しく、今日も暮れてしまつたことを知つた。毎日のやうに職を求めて歩いて、いろ／＼な人を訪ねた。紹介してもらつた人から、また他の人へ紹介状を書いてもらふやうにして、知つてゐる人、知らぬ人の分ちなく、出来るだけの手蔓を探して新聞社や雑誌社などへも行つて見たけれど、直に月給をくれて生活を安全にしてくれるやうな處はなかつた。彼は、まだこれから後も、先方で厭な顔をするのを知りながら、其等の人々の處へ歩き廻つて頼んで見るより他に生活の道を見出す術はないと心で思つてゐた。而して、今日にも、また此の下宿屋の主婦が宿料を催促にやつて來たなら、今夜、逃げてしまふと考へてゐた。此時、彼の心は、あの白く乾いた

道の上に走つた。車が通り、人が通つて、白い烟のやうに沙塵のたへず立ち上つてゐる濠端の道を電車にも乗らず歩いてゐる。額際から汗がたくりたくりと足許に滴るのであつた。Kは、かうして毎日のやうに口を頼んで置いて、最も有望に思はれた先輩の家に出掛けて行つたのであつた。遂に、其の方も駄目といふことが、先刻はがきで知らして來た。彼は、其のたび／＼歩いて行つた道の光景を思ひ浮べたのである。

此時、勝手許の方で、主婦の物を言つてゐる聲が聞えた。Kには、此の四五日といふもの、主婦の聲を聞いたたびに心が暗くなつた。其の尖つたやうな物の言ひ振りが、たへず自分に當て付けて他人に向つても物を言つてゐるやうに聞えたからである。Kにとつては、また自分の食料を拂はずにゐるといふことは、消極的に罪を犯してゐるといふやうな氣持がした。而して、主婦が自分とは、全く關係のない他人に向つて話してゐる言葉を聞いてすら責められるやうに胸

が躍つた。而して、主婦はたへず自分の拂つてゐない下宿料に對して一刻でも、これを心から忘れるやうな女でないと思つた。かういふやうにたへず自分が此の主婦から疑はれてゐると意識すればする程、此の下宿屋に居悪くなつたのである。

痴 白

Kは、とう／＼眠つゞけて、晝飯を食べずにしたつたことを、せめては幸福であつたさへ考へたのである。何となれば、飯を食べる時、最も自分の食べることについて責任を感じた。故なくして、全くの他人が自分に無代價で食事を與へるものでないと知つたからである。同時に、自分を疑つて決して好い感情を持つてゐない主婦の心を直覺することが出来た。其れを免れることが出来たからである。

8 彼は、主婦に對してばかりかう感じたのでない。あの、うすら黙つた、よく肥つた背の低い下女にすら何となく氣兼ねせなければならなかつた。Kは、自

9 から自分の卑屈を耻ぢた。此の廣い世の中に自分の坐つてゐる場處がなかつたのである。

其れにしても、もう日が暮れかゝつてゐる。何等か此家の秘密を探るやうな考へで、耳を澄してゐると勝手許の方で茶碗の觸れ合ふ音が聞えた。Kは、また夕飯の時刻が來たことを思つた。飯を食べる時が來ると、幾たびか心の中でくりかへされた厭な考へや、屈辱とも名づけるやうな感じが、新に頭に上つて來て、どうしても、此時、此の家では、夕飯を食べるやうな氣持になれなかつた。きつと、女中に此の夕飯を自分の室に持つて來さす場合にも、主婦は、いろ／＼のことを考へたであらう。『果して、此の飯の金を拂つてもらへるだらうか？』と心のうちで幾たびもくりかへしく考へたに相違ない。而して、もし拂つてくれぬなら、こんなにしてお客扱ひにして膳を出すのは馬鹿らしい。そんな理由はないと心憎く思つたに相違ないのである。

痴 白

それではなければ、もとより自分を憐れむがために、または尊敬するがために持つて来る夕飯でないのだから、社會の習慣律に従つて止むを得ず運んで来る食事といつて差支へないのであつた。それは、かうして泊めて置く限りは、一日に、三度は食事を出さなければならぬといふ掟に従つたのである。人間が、一日に三度食事をするといふ極めて此の社會の普通である習慣に對して、反抗することが出來ずに仕方なしに持つて来る食事であると思つた。

Kは、生きんがためには、これ位の耻や、外聞は忍ばなければならぬと知つてゐる。けれど、何となく、今日ばかりは夕飯すら食べたたく思はなかつた。彼は、黙つて、椽側から庭に下りると、日まわりの大きな葉蔭に身を隠すやうにして、裏口から町に出たのであつた。

町に出ると、いろんな人々が、まさに遠く去りかけてゐる、而して來年までまためぐつて來ない夏の夕暮方の赤々とした光線の漲つてゐる道の上を歩いて

11  
ゐる。Kは、このありふれたもうたび／＼見た景色に對しても、何となく其の別れが惜しまれた。而して、同じくこの見飽きてゐる社會の有様に對して、淡い懐しみと新しい興味を感せずにはゐられなかつたのである。

しかし、たとへ自分ばかりが、かういふやうな心で眺めても、是等の人々は、誰れ一人として自分の生活について心配を分つてくれるものはない。また自分が、誰の袂を捕へて生活の苦しみを訴へて見やうもない。若しあの漠然とした、五千萬の同胞がといふやうな意味の心持からして、自分が、知らぬ人の袂を捕へたなら、きつと道を歩いてゐる人は、自分を狂人だといつて振り放つて冷かに睨んで行くばかりでない交番へ訴へて出るかも知れない。而して、自分は、通行を妨害した理由で監禁せられるかも知れない。社會といふものは、すべて其様に個人的に出來てゐるものである。然るに、なせ、自分は、是等の人々、殊に女に對して懐しいといふ感じを抱くであらう。Kは、自分の心に問ひたゞ



して、其の原因を博愛といふやうな、道德學者が名づけるやうな美しい意味の感情とは見做さずに、もつと生物にとつて必然の關係ある、性慾の發作と見做したのである。其の性慾の發動は、無自覺で、盲目的のものである。其の極めて、淡い時には、詩歌的情緒となり、最も熾烈の時に於ては、姦淫となり、野獸と等しい、人類の原始的時代に遡つて、殘忍性を帯びて來るものである。

三

12 Kは、財囊を探つて中を覗いて見た。幾何の錢もなかつた。彼は、限りない淋しさを心に感じた。而して、暫らく、音信を絶つてゐた故郷の兄の顔を眼に描いたのである。兄の生活に寡れた青い顔を見ると手紙を出すやうな氣にもなれなかつた。獨り、道を歩きながら、行李の中に残つてゐる品物を賣ることを考へてゐた。しかし着物といふ着物は質に入れ盡してしまつた。書物といふ書

13 物は、賣り盡してしまつた。僅かに残つてゐる數冊の書物は、これを古本屋の店頭並べて置いたならいづれも賣ることを禁止になるやうな種類のものである。而して、二たび欲しいと思つても容易には手に入らないやうな書物である。

Kは、ある會社につとめてゐる時には、忠實に其の職に働いたのである。しかし、他の多くの人々のやうに自分よりも上位の椅子に腰をかけてゐる役員等に對して諛ふことが出来なかつた。而して、常に神経質の腫で、其等の人々の顔を見てゐる。これが裏面の原因となつて、いつまで経つても、月給が上らなかつた。而して遂に、職を奪はれてしまつた。

其れからは、Kは、新に職を求める考で所々方々を歩き廻つたけれども、誰れも、親切に其の願ひを聞いてくれる人はなかつた。さうしてゐるうちに、下宿料を拂ふことも出来なくなつた。それどころでない湯にすら幾日も入らない

やうな境遇となつた。かうして、彼は、幾たびとなく下宿屋からは追はれて、或る夜など、あてもなく寂然として眠静つた町の中をぶら／＼歩いてゐて明かしたこともある。

痴 白

其様な晩などには、殊に、なんで人間は此の世界に生れて來たのだらう………もし生れて來なかつたなら、こんな苦しみを受けずに濟んだらう………といふやうなことが考へられた。また、生れて來たものが、食ひ、而して働き、眠るといふやうなことは大自然の掟のやうにも考へられたのである。其れが出來ない社會にあつては、自分が決して悪いのではない、すべての人間が悪い習慣を作つてしまつて、それに惱まされてゐるやうな氣がしたのである。

14  
もう、一度すべての人間は原始に立返つて、生活の道を歩き直して出て來なければ、幸福は、此の世界に於て得られないやうに思つたのである。其れは自分の周圍を取り巻いてゐる、重苦しい、而して暑苦しいあらゆる虚飾のための

15  
事物や、誤られたる目的で Civilization の造つたものを破壊することであつた。もう一つは、こんなに苦しい境遇にありながら、たえず盲目の本能が襲つて來て、それがために、足場が、闇となつて狂ふ時がある。いはゞ營養不足で、神經が衰弱して瘦せてゐる體にも、本能の熱火だけは宿つてゐて意地悪く燃える時があるのである。其のたびに、其の人は、傷ましい人生の姿を露出した。彼れは、また其の一人である。自からも知つてゐる。

かうして社會の生活といふものに苦しめられてゐる間にも、たへず頭を擡げて、五體の中にうごめき騒いでゐる熱い盲目の性慾の刺激がある。其の刺激が、彼に兩性についての研究を促したのである。Kは、いろ／＼と金の工面をして其の精神的もしくは肉體的の煩悶の起つた當時に於て、經濟學に關する書物と性慾研究に關する書物とを買ひ求めたのである。而して、尙ほ、此の零落を一切つた最後まで賣らずに残してあつたものは、最近魯西亞の極端なる理想家の

痴 白

悲惨な生涯と彼等の運動とを書いたものと、も一つは、全く肉的な Sensuous な意味に於て、觸覺に起るべき筈の幻覺を空間的に、視覺と想像力とによつて満足させるための書物とであつた。其れは、千九百〇三年に獨逸のベルリンで

痴 白

出版した精巧を極めた裸體寫眞の大部のものである。これは高價な書物で、これを買ふために書物も着物も犠牲にしたことを覺えてゐる。其れ程、好奇心を誘つた書物である。其他に、もう一冊醫學上より見たる性慾の觀察を書いたものがあつた。

16  
これだけの書物は、どんな場合にも賣るのが惜しまれたのである。常に孤獨な、悲しい心を抱いて街頭を歩るく自分に勇氣をつけてくれたものだからである。また、兩性問題が、全く、人生の秘密になつてゐる感じがするのを科學的に痛快に解剖したり、また虚飾と物質美で真相を隠してゐる女の肉體を赤裸々に露き出して見せることは、少なくとも人生の表面を包んでゐる虚偽の誇りを打

17  
破したものである。而して、自分の美に對する憧憬をやはり現實的な醜惡なものとして考へることが、愉快であつた。

美しく着飾つてゐる女を、美として憧がれるよりは、赤裸々にした女を見て、動物として取り扱つて空想した方が生々しくて人間といふものに觸れたやうな氣がする。……自分は、實感主義者であると思つた。

Kには、其等の二三の書物が頭に浮んだがそれを賣る氣にはなれなかつた。Kは、今、夕暮の町の中を歩いてゐる。空は、微茫として、白い息を吸き込めたやうにどんよりと眠氣を催して、夢のやうに頭の上を流れてゐる。全時に町の屋根の上を流れてゐる。星の光りは、遙かに霞んで瞬きをしてゐる。Kはいつも書物を賣り慣れた古本屋の主人の顔を目に描いた。鼻の尖つた、眼の落ち窪んだ顔が意地悪く、また頑固さうに思はれたのであつた。

痴 白

四邊は、ほんのりと暗くなつた。町の兩側に點つた瓦斯や電氣の光りは、彼の眼に美しい光りを投げた。

Kには、三年ばかり前に暫らくの間全棲してゐた女がある。其の女とは、事情があつて、別れてしまつた。お葉といふ名である。彼女が、自分に、いつまでも——また遇ふ時分までの紀念にと——置いて行つた指輪があつた。Kは、今、其の輪指のことを思ひ出したのである。

其の全棲してゐた家といふのは、古い家であつて、六疊の居間には、西向きの高窓がついてゐた。しかし何となく濕氣のある、暗い室であつた。壁の色までがうす鼠色に塗られてあつた。窓の外は、僅かばかりの庭になつてゐて、庭には、別に何の木も植えてなかつた。たゞ雜草が、丈高く伸びて生ひ茂つてゐる。而して、夏の終り頃に、早くも此處には秋が來てゐる感じがした。

或る日、其の庭を二人で眺めてゐながら、行末のことや、其の日、其の日の生活についていろ／＼と女と語り合つたことがある。其の時、女は窓に凭つて、茫然として下を向いて、自分の指頭を眺めてゐたが、ふと、左の中指にはめてあつた指輪を抜きとつて、

『これをあなたにあげて置ませう』と言つた。Kは、黙つて其の金の指輪を女の掌から受け取つた。もう、庭には日が蔭つてゐて、黄金の指輪には空の殘光が映つて、遠い、昔のロマンチックな物語りが思い出された。それは森の中で悲しい戀が、あるプリンセスと、あるプリンセスとの間になされたといふことである。其の時、森では、鳥が啼いたといふことだ。……

さながら、逝く夏を悼むやうに、蜩の啼いてゐる聲が、町を越へて、彼方の静かな夕暮方の森に起つて、西の夕焼の空に響くやうに聞えてゐたのである。其の女と別れた日のことが今でも記憶から忘れられない。いまだにあの、古い

家の、あの室の有様などが目に残つてゐる。草の風に吹かれてゐた、淋しい庭の面影も目に残つてゐる。

今は、ちやうど其の夏が三たびめぐり來つて、また過ぎて行かうとしてゐるのである。やはり、あの室に西向きの窓はあゝなつてゐるに相違ない。もし、日暮方の時分にあの窓際に立つてゐたなら、遠くで、やはり行く夏を惜しむ蜩の啼聲が静かな海のやうな空に響いて聞えることだらうと思はれた。Kは、あてもなく燈火の明るい夜の町を歩きながら、其の指輪のことを考へた。

『あの指輪を賣つてしまふか知らん。』と、彼は、口のうちで言つたのである。而して、眼を擧げて、物狂はしげに往來を通る人々の顔を眺めた。

日は、もう全く暮れてしまつて、此の世界は闇に包まれてゐる。たゞ瓦斯と電氣の光りが人々の顔をほの白く浮き出して見せた。而して、餘程近寄つて見詰めなければ往來を歩いてゐる人々の顔の美醜さへ分らなかつた。彼は、うち

濕つてゐる夜の大氣の底に、黙つて開いてゐる薔薇の花を思つた。而して、ほんのりと白い其の花の影を見たばかりでは、何となく心は満足が出来なかつた。近寄つて其の香ひを嗅いで見なければ満足が出来なかつた。ちやうどこんな憾みがある。しかし、女のいろくの歩きつきや、姿は、Kの眼にはいろくの想像をめぐらせたのであつた。

Kには、もう二たび、あの女と遇ふことは出来ないやうな感じもした。別れてからいまだに其の行衛が分らないからである。もつとも、分れた當座には、女の方からもたび／＼訪ねて來たり、手紙を寄來したりしたのである。さういふ時分には、Kは、女により多くの未練があつて、自分はずき纏はれてゐるやうな氣がしたのである。さう思ふと、何となく其の女のことを思ふのも、また顔を見るのも厭な氣持がしたので、ごうかして、自分は、全く女から無關係になつて、責任を免れたいといふやうな考が起つた。而して、女に、分らせない

やうにと度々下宿屋を換へて自分の行衛を晦ましたのである。女は、二三度Kの勤先へも來たけれど、其の毎に忙しいからといつて遇はなかつた位である。其のうちに其の年の秋となつた。さなきだに物思ひに沈み勝ちな彼は秋が來ると、ふと、其の女はごうしたらうと考へたのである。すると、是迄忘れてゐた柔しな彼女の眼や、微笑みが目に浮んで、しみじみとそれが懐しくなつて、遇つて見たくなつた。其處で、其の女の居處を探して見たが、もう、今迄ゐた處には居ずに行衛が分らなかつた。

やがて、冬が來た。冬になると、Kはよく朝から酒を飲んで、社に出るとストーブの傍で頬を赤くして不平を言つたものである。其の時分から、K自身は會社の方が面白くなかつた。やうやく冬が去つて、まだ花の咲くには早い、尙ほ、乾いた瓦屋根の建物の上を寒い風が吹いてゐる時分に、會社では人員淘汰があつた。其の際、ついにKは、心で期してゐた如く免職となつたのである。

それから、かうして毎日のやうに口を探ねて歩いてゐるが思ふやうな仕事が見當らないのである。而して、此頃しみじみと人生の頼み難ないことを感ずると同時に、眞心を盡してくれた別れたお葉のことが思ひ出されて彼の心は、あてなく其の女に憧がれ始めた。彼は、切りに其の女の行衛を知りたいと思つた。『死んでしまつて、ゐないのかも知れん』と、道の上に立止つて、Kは、かういふと限りない淋しさが心に迫つて來た。而して、偶然に、今夜、其の女と此の道の上で出遇つたなら、どんなに嬉しからうと儂ないことを想像して、行く女に目を配りながら、悄然として歩いてゐた。

## 五

明る日、Kは、小さな紫色の箱の中からお葉からもらつた指輪をとり出して眺めてゐた。其の金の指輪には、小さな赤い寶石がはまつてゐる。其の色は、

赤いインキのやうな、小指を切つた時に小さな鮮紅な球形となつて湧き出る血の滴れのやうに、すき透つて見えた。而して、この指輪を白い柔かな指にはめて、お葉が膝の上に掌を重ねてゐる時の様子が浮んだ。この赤い寶石の色はお葉の派手な着物の色を映して紫色を帯んで、ちやうど葡萄酒をコップに入れて透して見る時の色のやうに見えたこともあつた。

Kは、其の指輪を取り出して、自分の顔をこの小さな赤い寶石の上に映してゐた。もう幾日も、人間の温味の宿つてゐる指に觸れずにあつた黄金の指輪は、さながら、昔のロマンチックな時分の記憶を夢見るやうに、ほんのりとうすく息を吹きかけたやうな曇りがついてゐる。彼は、この指輪を紙に包んで下宿屋を出たのである。

都會の端になつてゐる町の寺の境内には、油蟬の聲が、雨の降り注ぐ聲のやうに喧しく聞えてゐる。氣候は土用も、既に過ぎてしまつて、太陽は二たび遠

く地球の上から去りつゝあつたけれど、まだ正午過ぎの暑さは、尙ほ、焼くやうに日は瓦石の上に照りはたゞいてゐる。彼の悄然として道を行く姿は、地上に小さな黒い影となつて落ちて動いてゐた。

Kは、ある鐵工場の横手に來た時塀について曲つた。赤錆の出た煙突が、コバルト色の光のある空に突立つてゐた。大空の下には、低い押し潰されたやうなブリキ葺の建物があつて、其處からは、常に濁みた鐵板を叩く響き音が聞えて來るのであつたが、此日は職工が休んでゐると見えて工場は沈黙を守つてゐた。

Kは、壊れかゝつた亞鉛板の塀に添ふて道を曲がりにかゝると其處の隅に内側から突立つてゐた一本の榎の木があつた。枝を切られて、殆んど坊主頭となつて、太い幹が、僅かばかりの枝を差し出してゐる。彼は、この慘たらしい木の光景を見た時に、虐げられたる生といふことを考へさせられたのである。獨

り、人間ばかりではない、すべての生物は、生を迫害する自然力に對して、常に苦闘をつゞけてゐるのだ。

其の木の葉が銀のやうに、蒸し暑い風に翻つてゐた。

彼は、其處を曲ると、遙かに電車の通る響きを聞いた。だらうと疲れたやうな町が眼の前につゞいてゐる。このあたりには、軒の低い古着屋が幾軒となく並んでゐて、中には色の褪めた古着や、まだ新しい赤い色の巾などを下げてゐた。而して、紺色のものが、一種の重苦しい感じを何物にも感じ易い彼に與へてゐたのである。是等の多くの古着屋の間に混つて、一軒の紋書屋があつた。其の家の前に來ると、何となく乾いたやうな白ちやけたやうな陰氣な感じがしたのである。Kは、自から神経衰弱にかゝつてゐるから、こんな病的な氣分になるのだと思つた。

26

こゝまで來た時、其の紋屋の向ひ筋に、古道具屋があつたので、Kは、其の

27

店に入つて、懐から金の指輪を取り出して、包んで來た紙を開いて、若い男の前に示したのである。其の若い男は、暫らく眉を顰めて指輪を眺めてゐたが、やがて起ち上つて奥に入つて、試金石に摺つて眺めてゐた。其の石に摺る音は小さくて聞えなかつたが、Kは、此の瞬間に於てお葉の人格が試験せられるやうな氣持がして胸がどきどきとなつた。やがて、男は、指輪を握つて奥から出て來た。而して、決して、これは偽物であるとは言はなかつたが、あまり金の性質がよくないからといつて、極めて、踏み付けたやうな安價で買ひ取らうと言つた。Kは、あまり足許を見た仕方に腹立しくなつて其の指輪を奪ひ戻して其の店を出た。

其の次にKの入つた古道具屋といふのは、彼の埃りつばい鐵工場の塀に向つて道の片側にあつたので、彼が、來る時其の家の前を通つたのである。しかし其時はあまりさびれてゐるので入らなかつた店である。其處では、四十餘りの



男がゐて、試金石で摺つて見るやうなことはしなかつたが、やはり安い價を付けたのである。Kは、何となくお葉に濟まぬやうな氣がした。けれど、前の店よりは幾分か價がよかつたので、Kは、あきらめて其の指輪を賣ることにした。

痴 白

いよく、賣るといふ時に、何となく、もうお葉の記憶にまでも別れてしまふやうな悲しい氣分になつた。しかし、また、手に入るべき金のことを考へると、現在の快樂に打ち勝たれなく思はれて、直様其の悲しみは何處へか消えてしまつた。而して、金を得てからのことばかりが考へられた。

28

十五六になる小僧が、其處の店から、Kの跡につけて下宿屋の前まで来て、金を手渡したのである。店を出る時、四十餘りになる男が、これが、始めての人から物を買ふ時にする、かういふ商賣の規則であると言つた。彼は、盜賊と疑はれたやうな氣持がして、不快を感じた。而して、幾何の金を握ると、急いで下宿屋の戸口に飛込んで、自分の室に入ると、疲れたやうに机の前に倒れた。

29

汗が、毛孔から迸つて、顔からも、脊中からも流れてゐる。

彼は、お葉の指輪を賣つた金で、一夜の歡樂を買はうと欲した。彼は、心のうちで、デカダンのお葉の身についてゐた品物を賣つた金で、自分の實用に供するやうな品物や、もしくは、眞面目な生活のために、買つたり、費用するのは、何となく不道德であると考へた。やはり、此の金は、一夜の歡樂のために使ふべき性質の金である。ちやうど始めて、お葉を買つた時のやうに、今夜を、ある女と共に楽しく、また淋しく送つて、而して、お葉の身の上を偲ぼうと思つたのである。

## 六

Kの頭は、此頃病的になつてゐる。體は疲れて、神經が過敏に働いてゐる。而して性慾にしても、性慾其物よりも、想像力を寧ろ楽しむと云ふ様に、體力

痴 白

が疲れて、空想力ばかりが熾烈になりつゝあつた。

其の日の午後、Kは、下宿屋をぶらりと出た。自分の本能を追うのは、傷ましい憧がれである、思つてすべての物を見れば、其處に幾千年の前から本能に盲従して来た以外には無目的で過ぎて来た人生が其儘になつてゐた。けれども、彼は、尙ほ自からを、所謂世間でいふやうな理想家もあるものだと假定して自分を色情狂だと思つてゐる。たゞ自分は、心で思ふことや、空想したり、想像したりすることを、理性で制し切れずに實行した輩のやうに、女の臀肉を鋭利なメスで剥り抜いたといふやうなことはしなつたのである。しかし、彼等の心理状態をよく瞭解することも出来れば、血を見なければ飽かないといふ程な残忍性すら想像することは充分に出来たのである。彼は、狂ひ猛けるやうな好奇心と、ちら／＼として焰の如く眩ゆかつたり、昏くなつたりする瞳で、道行く女の後姿を見送つたのであつた。

午後の四時頃の太陽は熟した林檎のやうな色をしてゐる。町の瓦家根がざら／＼と濡れたやうに光つてゐる。電車道について、人が歩いて行く。頭に軽く響くやうな軋り音を立て、黄色く塗つた電車が彼方を夢のやうに通つてゐる。また、橋の上には、車の音が轟いてゐる。自働車が来たり、自轉車が行つたりしてゐる中を女が行く。娘が行く。小僧が行く。また、女が行く。Kは、獸物のやうな、悪魔のやうな自働車を憎々しい目で見送つた。而して、ある坂の下の町角の氷店に入つて休んだ。ちやうど其時、店頭には他に二人ばかり客があつたばかりであつた。Kは、がっかりとして、疲れた體をぐつたりと其處のベンチの上に投げかけた。而して、うつとりとして、女が氷を削つてゐるのを見てゐたのである。

白く乾いた道の上を嘗めるやうにして、涼しい風が、何處からともなく吹いて来て、頬を掠めた。彼の心は、何物かを憧がれて、心地よい觸覺を感じた。

其の氷を削つてゐる女は、年頃二十一、二の肉付きのしつかりとした強さうな女であつた。而して、紺ぼい着物が、括つたやうに其の堅い汗ばんだ肉體に纏

はつてゐた。此時、Kは、怖しい想像をめぐらしてゐた——銀線のやうなメスが、電の如く赤い無數の腺織を切つて縦横に閃めく——同時に肉の緊張といふことを考へると、Kの頭は、ぐらくとして眼が眩んだのである。

『おれは餘程、神経衰弱だな。』とKは、口のうちで言つた。而して、眼を傍に外すと、直ぐ、次のベンチの上に女の、束髪の黒色の大きなたば櫛が置かれてあつた。Kは、其れを見ると瞳が燃え付くやうに、其の櫛の上に注がれた。黒い、しかも油の光りを含んだセルロイドの輿へる重苦しい感覺！これは、あの女の使つたのだと思つたからである。

32 而して、Kは、次の瞬間には、この櫛を盗みたいと思つた。この櫛は、いかにいろ／＼の連想を彼の心に呼び起して思ひ悩ましたか知れかつたのである。

33 彼は、もう、いかにして櫛を盗むかといふことより、心には何も思つてゐなかつた。

Kの眼は、慌しく四邊に漂つた。ちやうど深淵に映つてゐる太陽のやうに、犯罪の自覺に戦きながら、なほ、性慾を追う感情のために火の如く輝いた。而して、耳はガンガンと鳴り始めた。突然、奥から女が顔を出して、

『お末、櫛を片附けて置きなね。あんな處に邪魔ぢやないか。』と言つた。Kは覺えず顔が赤くなつた。三十五六の瘦せた女の顔がまだ此方を見てゐる。Kは急に空想から醒された。而して限りない哀愁と自からを嘲り、憐れむ心が萌したのであつた。——己の心のうちまで、あの女に分る譯がない。偶然にあの女は、あゝいつたのだらう……たどへ、己の心のうちまで悟つたとしても、己の名を知つてゐる譯がない。また何處に住んでゐるかさへ知つてゐる譯がない。此處を出れば、もう互に忘れてしまふのだ——と考へながら、Kは、殆ん

ど無意識に前にあつた氷の盛られたコップを取り上げて啜り始めた。冷味が、

癖 白

慄然として骨にまで浸み入るやうであつた。此時、店頭を、汚れた鼠色の洋服を着た薬賣が、日に焼けた黒い顔で、手風琴を鳴らしながら、濁み聲で、妙な節で歌をうたひながら行つた。夕暮方の町には、車が通つた。人の歩みが次第に繁くなり始めた。Kは、獨り、哀しげな手風琴の音に耳を澄して考へ込んだ。

手風琴の鳴音と、歌の聲は、互に纏れ合つて、夕暮方の町を遠くに消えて行つた。

『己は、この社會で、生活の途を見出し得ないで、しかも人一倍本能慾の強い白痴なんだ。己は、あんなやうにどうせ旅へ出て終る身の上であらう……』と、Kは、口の中で呟いた。而して、錢を盆の上に乗せて、悄然として氷店を出て行つた。忽ち、夕暮の町のごよめきや、人影は、小さな彼の姿を隠した。

なぐさめ

家の裡は暗くて濕りかへつてゐた。天地の間を音のない靜かな時間がついて流れる裡に、いつとなしに此家も朽ち滅びて行く悲哀を感じさせた。天井張りが低くて壁や襖が破れて、窓から青い空が覗はれる。要治は無窮の青空に思ひを馳せると、そらろに此の家の内が陰氣で心が腐されて行くやうな氣がしたのであつた。殊にたへず母の溜息と、この世の中を呪ひ怨む獨り言を聞かされ

るのが、子供心ながらに悲しくなつて氣が滅入るのであつた。

要治には自分の住んでゐる家がさながら獄屋のやうに考へられた。日の光りも射し込まない。笑ひ聲一つ洩れない。何の楽しみもない家である。しかし此の家を見捨て何處に美しい楽しい家を見出すことが出来るだらう。少年にはたゞ一人の母であつた。他の頼る處のない、廣い世界のたゞ一つの家であつた。けれどこの家がつく／＼厭になつて。早く死んでしまつて此の世界から何處か遠い處へ行つてしまひたいと思つたこともある。

彼が物心の付いた時分には、父親は死んでゐて居らなかつた。其時からヒステリーの母の青い顔色と毒氣を含んだやうな怨めしげな泣言とは、まだ何も此の世中のことをよく知らなかつた少年の心を暗くした。是等の憂鬱な氣分が少年の清らかな心を押へ付けて、彼の青い瞳の色を曇らした。而して遂に此の世界から明るい賑やかな喜ばしい色彩や光線を奪ひ去つてしまつた。けれど要治は、

37  
尙ほ自分の病める母を懐しく思つた。何となれば誰れ一人として母を除いては自分を憐れみ護つてくれるものがなかつたからである。多くの子供等が慈母を懐しむ如く、雛鳥が親鳥を懐しむ如く要治は母の袂に縋つた。けれど幾多の悲しい過去の經驗が遂に神経や感情を病的に變化してしまつた彼の母親は、決して世間の心ある母親が子供等に對してする如くでなかつた。

母親は自分の言ふことなすことが、未だ人間といふものについて、社會といふものについて多くを知らない少年に、いかなる感化を與へ、いかなる感情を抱かせるかといふやうなことは考へることが出来なかつた。常に病の發作が彼女を襲つた時には、心の底は暗くなつた。忽ち眼の前には重い愁しみの雲が垂れて、背後からは痛く鞭打たれるやうに譯もなく心が慌て、暗い深淵を見落したやうに動搖と不安に驅られたのである。而して子供が其處に居るといふことを全く忘れて、しく／＼と泣き、身を悶えて嘆き、この苦しい幻想から身を逃

れる道を探ね當てやうとして、感情は徒らに盲目で曠野を走り、果ては疑惑の黒い壁に突き當つて聲をあげて罵り、怨むのであつた。

『私みたいな不仕合なものは、死んでしまつた方がいゝかも知れん……』  
と言つて、ふら／＼として寝た身は影のやうに坐を起ちかけた時であつた。

要治は母のすることがすべて病氣であるといふことは知らなかつた。またもとより母を病氣たらしめた過去の生活とか複雑な事情とかいふものについて知らなかつた。たゞ現在、自分等の生活を蔭に隠れてゐて迫害する怖しいものがあるやうに思つてゐた。此時要治は、泣いて母の袂に縋り付いた。胸には悲しい大きな波を打つて、眼は張り裂けんばかりに血走つて無理に母の起ちかゝつたのを力を限りに出して其の坐に押し静めた。

『お母さん、死んぢやいやだよ。後に僕一人残るばかりで淋しいもの、お母さん死ぬなら僕も一しよに死なしておくれ。』……と叫んだ。

死！ といふものは、どんなものであらうか？ この少年にはもとよりはつきりとした思想があるやう筈はなかつた。しかし本能はこの少年に、たゞ死の怖るべきものであることを感じさせた。彼は漠然とした考へではあつたが、死といふものは、この生きてゐて動いてゐる人間が黙つてしまつて動かなくなつた時の形を言ふのだと知つた。また、現在此處にかうしてあるものが、永遠に何處かへ姿を隠して、二たび見ることの出来ないものだと知つた。かう信じてゐる少年は、母が此の世界から遠く去つてしまつて、二たび歸つて來ないといふことを悲しく感じない譯には行かなかつたのである。

## 二

少年の母親は四十年の過ぎ去つた生活を顧みると、さまざまの光景が畫のやうに眼の前に浮んで來た。而して今でも彼女の弱い心を脅したり、掻き亂した

りするのである。死んだ夫は彼女を苦しめた。夫は酒を飲み、女を買つて、家産を蕩盡してしまつた揚句に是等の病める女と少年を残して死んでしまつた。

女は夫の無理な仕打と残酷な憂目を見て、幾たび暗い夜を村の端を流れてゐる河の橋の上に走つたか知れなかつた。しかし身を黒すんだ河底に投げやうとする刹那になつて、急に感情が靜つて、いつしか耳は下を渦巻き流れ杙に嘯いてゐる怖しい水聲に取られてゐた。また發作的に新婚の樂しかつた日の夢が昨日のやうに鮮かに眼前に繰りかへされて見られた。さながら不思議な織物のやうに、闇の中に美しく艶かに織り出されて見えた。彼女は、烈しい執着と未練を此の世の中に感せずには居れなかつた。而してまた夫の改心することもあるであらうと思ひ返して、人知れず我家に戻つて來た。二たび見る筈でなかつた我が家が戀しかつた。細目に開けて抜け出た戸の隙間は其の儘闇の中に黒く口を開けてゐる。彼女は其處からまた身を忍ばして中に入つたのであつた。しか

41  
し夫の死後はこれに變つた冷酷なる生活難は用捨せず二人の身の上に迫つて來た。彼女は漸く衰へて、眞症のヒステリーになつてしまつた。

もはや此女の顔や、指頭を見ても紅い澄んだ血液は脈管を流れてゐなかつた。其處には黒すんだ重々しい疲れた血液の物憂く通つてゐるのを見た。皮膚の色は日にまし青白くなつて、臉は漸々重く垂れて、頭髮は薄く白くなつた。病的な思想と肉體は外界の刺激に對して反抗し、積極的に生活をつゞけて行くといふやうな氣力も缺乏して、たゞ其の日其の日を生あるために泣き、怨み、獨り言をいつて誰に訴ふることもなく日を送るやうになつた。過去のごとは、すべて彼女にとつては重苦しい悪夢である。しかも其の悪夢は、まだ消え去らずに頭に宿つてゐて、彼女を魘してゐるやうな氣がしたのである。既に死んで地となつてしまつた夫を怨み、其の遺して行つた罪惡に對してこれをあきらめ、これを許してやるが出来なかつた。また夫と共に自分を冷笑した淫らな女供が、

まだ此の世界に住んでゐることに思ひ至ると、彼女は怨みと涙なしには、同じ日の光りを浴しながら生を営んでゐるといふことに對して平氣であることが出来なかつた。

めさぐな

此時から此の世界は暗くなつて、希望の光りもなければ、幸福の微笑も認めることが出来なくなつた。彼女にはたゞ生活の不安と漠然として未來に豫期せられた死といふものゝ他考へるものがなかつた。彼女は淋しく、子供と共に日を送つて、寧ろ自然の力で斷たずに此儘に長く見逃して置く自からの生を呪つたのである。地球は廻轉して春が來て、野原は燃えるやうな緑色の若草に掩はれて、陽炎が立ち上り、長閑な牧歌の聲が圃から流れて來たり、無心に空を吹いてゐる風に馨しい花の香氣は託されて來ても、一たび此の古い家の傾いた窓をくいて、暗い女の顔にかゝつた時は、悲しみを吹く風に變じた。歌の聲は徒らに此の寡れた女の心を焦立たせて、現實の薄情と冷淡を感じさせた。なせ早

く自分は墓に行つて、氣樂に苦痛のない世界に靜かに眠らないかと思つたのである。

春になつても、彼女の眼を惹いたものは、花も咲かない日蔭の墓場であつた。白く葉の涸んだ木立の間にさまざまの苔の蒸した墓石がある。其處には、要治の祖母が眠つてゐる。空漠とした墓地には、常に物淋しい、淡い悲しい暗い影が漂つてゐて、音もなく朝となり、晝となり、夜となつて、かういふ日がついたのである。此の墓地の傍らを通る時に、彼女は常に、永遠に生活の苦しみを知らない休息の時を考へたのであつた。

要治は夜半、怖しい幻想に魔されて眠から驚き醒されたのである。四邊を見廻すと枕を並べて臥てゐる母の姿が見えなかつた。しばらく耳を澄して心のうちで疑ひ惑つてゐると窓の外には降り注ぐ月の光りが青く照り渡つてゐて虫の音が、斷え絶えに聞えて來た。暫らく茫然としてゐるとさめくと泣いてゐる

めさぐな



母の聲が、静かな夜の空氣に絹を裂く如く流れて來た。要治はたび／＼こんなことによつて、無邪氣な靈魂が驚かせられた。彼は、泣聲のしてゐる方に走つて行つた。母は、自分の知らぬ間に床から出て勝手許に來て、井戸の傍に立つて蓋を外して底を見詰めながら泣いてゐるのであつた。要治は、母の袂に取り縋つて、

めさぐな

『お母さん、死んでは厭ですよ。僕は、お母さんの言ふことなら何でも聞くから、どうか死ななで生きてゐて下さい。……』と訴へたのであつた。其の切なる叫び聲は、暗黒にして空虚な深い深い井戸の内側に反響して水底に落ちた。其處に怖い吠えるやうな意味の分らない響きが起つた。而して静寂な空氣に不安な波動を傳へたのである。

少年は、此時ランプの光りが、不安な赤い色を帯びて一室の黙つた物の上を照らしてゐるのを見た。また、油を吸ひ上げる音がいかに泣くやうに、人生の

無情を語つてゐるかを感じた。其後、夜になつて、ランプの濁つた赤い光りを見るたびに少年の胸には限りない哀愁と不安の念が萌したのであつた。彼はしみ／＼と生といふものゝ苦しみを、何よりも早く感じたのであつた。

『お前の大きくなるまで、私は我慢して此世に生きてゐるのだよ。』と母親が、陰氣な顔に涙を流して言つた時に、要治は、自分が直にも河へ走つて行つて母よりも早く此の世界を去つてしまひたいと思つたこともあつた。

三

この世界といふものが、かう常に不安な、頼りない、また苦しいものであつたなら、なんであの世間の人々は、我慢をして、強ひて面白おかしく見せて日を送つてゐるのであらうといふやうな疑ひは、たへず要治の胸の中に解けなかつた。而してかういふ不幸な、また物淋しい家は、廣い世間に於て自分の家ば

めさぐな

かりであるなら、自分はなんでこんな陰氣な家庭を撰んで生れて来たものだろうと自からを呪つたのである。

要治は、世間の活々としてゐる物に頓着をしない少年を羨んだ。いつしか自分の何事に對しても臆病になつたのを悟つたからである。また常に賑かに、面白さうに平和に氣持よく物を言ひ、子供を恵み可愛がる母親とか姉なる人を見れば、其の子供の境遇を羨んだばかりでなく、自分の家庭を呪ひ、母を憎く思つたのである。

しかしこんな考へは、僅かに或る瞬間に過ぎなかつた。少年の心にも此の不幸な母親が哀れに思はれたのである。要治は毎日憂へに沈んで涙ぐみ、押し黙つて、なほも内職をして僅かばかりの錢を働き、生活をし其の錢の幾分を自分に與へてくれる母を心から懐かしみ、憐れませぬにはゐられなかつたのである。

小學校の前の文房具店には、いろ／＼な學校用品になくても濟むやうな贅澤な

品物まで並べられてあつた。彼は多くの友達と共に其の店頭に立つて、物珍らしさうに硝子箱の中を覗き込んだ。友達は泊來品と言はれた繪具箱や、インキ壺や、色鉛筆などを買つて、異國の美に憧がれる好奇心を満足することはあつても、彼にはこんな少年時代の自由な若やかな詩的の好奇心を満足させるやうな機會が來なかつた。けれども學校で必要な品物だけは使ふことが出來たのである。要治は少年ながら、自分の境遇を知つた。苦しい中から、墨や筆を買つてくれる母親を憐れに思つた。

多くの少年が遠い高い青い空を望んで、小鳥の行衛を空想し憧がれてゐる間に、要治は早く現實の暗い鈍い、腥い壁に手を觸れてゐた。彼にはもう希望といふやうなもの、美しい夢はなかつたのである。彼は寧ろ鋭利な剃刀の青い光りを思つた。暗い深い音のない怖しい水底を考へた。

母親の内職をする時に使用する剃刀は、柄のところを紙で巻いてあつた。其

の紙は指の脂が染み込んで黒くなつてゐた。刃尖がほんの少し缺けてゐたけれど、たへず研屋に磨がしてゐるので青光りを放つてゐた。母は、一日其剃刀を持つて白紙を切つた。糸を切つた。外から射し込んで来る光線が手を翻へすたびに剃刀の刀に流れて閃めいた。母の仕事をしてゐる傍に窓があつて、其の窓の外に垂れ下つてゐる枝の青い葉影が、小さくなつて姿を剃刀の上に映する時  
もあつた。

彼女は一たび思ひを死といふことに寄せた時は、きつと瞳をこの鋭利な剃刀の上に落して考へ込んだ。而して指頭も動かさずに昵と刃尖を見詰めてゐたのである。其時は、彼女の黒い瞳が此の青光りを放つてゐる剃刀の上に焼き付けたやうに印されてゐた。

48 外界が曇つて、家の裡が寂然として何となく空氣が濕めり返つてゐる日暮方に、獨り母がかうして剃刀を見詰めて仕事場で思ひに沈んでゐるのを見た時、

要治は怪しいままでに心が騒いで、其の剃刀を怖しい氣味の悪いものご考へないではゐられなかつた。剃刀は常に母が仕事をしてゐる箱の三番目の抽斗の中に仕事か濟むと入れて置くのが例である。要治は夜になつて、母が剃刀を昨夜の如く紙に包んで、其の抽斗の中に収めるのを見届けるまでは何となく安心が出来なかつた。而して夜中になつてふと眼を醒ますことがあると彼は直に枕から頭を擡げて其の箱を見たのである。若しや剃刀の入つてゐる三番目の抽斗が開いてゐはしないかと思つたからであつた。だから、母親が獨り夜遅くまで起きてゐて、要治に先に床に入るやうにと言つたことがあつても彼は何となく不安で、床の中に入つても眼を閉じて眠入つてしまふやうなことはなかつた。而してたへす夜着の袖から顔を出して母親の姿を覗いたのである。

『お母さん、もうお休みなさいよ。』と、要治は幾たびとなく悲しみのために、小さな聲を震はして母を促したか知れなかつた。

他の子供等が、南の方の山々の頂きを眺めて明るく暮れて行く夕暮方に、いろくのお伽話をしたり空想に耽つてゐる時に、獨り要治は橋の上に立つて黒ずんで流れ行く下の水面を眺めて、うす闇の裡に囁いてゐる水音を聞いてゐた。

めさぐな

死！ 其れより他に、頭には何の考ふるところもなかつた。しかし死？ といふものはどんなものであらうか、其れはこの少年には理解することが出来なかつた。たゞ永遠に母に別れてしまふ。而して、自分獨りこの廣い世界に取り残されるであらうといふことを悲しく思つたのであつた。

要治の心を襲つた死の幻影は日に強くなつた。彼が學校の教室にゐて、窓の方を見て茫然としてゐると凄れた母の青い顔が浮んだ。忽ち、剃刀が閃めいて、音なく母の咽喉許から鮮紅な血の迸るのを見た。

50

彼は心が轉倒して、心臓が高く鳴つた。而して時間の終るまで其のことばか

51

り思つてゐた。時間が終ると彼は一目散に我が家へ歸つて来て、忍び足をして戸口に入つた。而して母の健全な姿を見てやつと安心したのであつた。

かういふやうな幻想は、要治が森に入つて遊んでゐる時にも、彼の頭を襲つたのである。茫然として半ば黄色くなつた木立を見上げてゐると、急に暗い影が落ちて来て地上に擴がつた。日が雲に隠れると共に冷かな空氣が肌に浸みて今迄の無心で遊んでゐた自分を責める如く感じられた。

風に吹かれて木の葉の摺れる音は、哀れな少年に母が今頃薄暗い室に坐つて泣いてゐる姿を思はした。またふらくと立つて井戸の傍に立つて下を見てゐる姿を思はした。要治は、日暮近く風の吹く野原の道を走つて、友達の群から獨り抜け出て、自分の家の方へ歸つて行くのであつた。

四

めさぐな

要治は母の泣き顔を見るたびに、自から河に身を投げて死んでしまつて、この苦しみと悲しみの多い世界から永劫に逃れたいと思つたこともあつた。

めさぐな

或時は村端の野原に立つて赤く日の沈んだ西の山を眺めて泣いた。若し眞に自分を思ひ愛してくれる眞の母ともいふ人が此の世界の何處にかゝるものなら、自分は其の母を探して歩くであらう。而して其の母にめぐり遇つて袂に縋り付いて胸の悲しい思ひを訴へる。其の時、自分は現在の母をいかに呪ひ、憎み、而して現在の母のしたことを眞の母に向つて訴へるであらうと考へた。しかし何處に其の自分の苦しき叫びを聞いてくれる母があるであらう？ 少年は、淋しく首垂れたのである。白い夕の靄が廣い野原にかかつた。彼は家に残されて獨り愁へに沈んで自分を待つてゐる母のあることを考へた時に頼りない空想は頭から消えてしまつた。而して全く哀れな不幸な母が懐しくなつて、家に歸つて來たつてである。

こんなやうな日がついて、いつしか悲しい秋が來た。

窓から射し込んで來る秋の光りは、青くて冷かであつた。高い大空に鳶は鳴いてゐる。森には多くの小鳥が面白さうに囀つてゐる。要治は其れだのに家へ入るとなせこんなに面白くなくて氣が鬱いで來るだらうと思つた。……

要治は怖る恐る母の坐つてゐる室に入つて行つた。寂然として火の消えたやうに静かであつた。風のない静かな日にも、木の葉は自然に梢を離れて地の上に落ちた。其の音を聞きたびに少年の心には秋の老けて行くといふことが感ぜられた。

母は青い顔をして箆笥の前に坐つてゐた。彼は一目其の顔を見ると冷かな感じがして、言ふにいはれぬ氣分になつた。今迄自由に天地を翔け廻つてゐた心が、もう此の家の中に捕虜となつて、何處へも行つてはならないやうに感じたからだ。而してこれから日が暮れてしまふまで、母の傍にゐてこの一日外へも

めさぐな

出ない哀れな母に同情をせなければ濟まぬやうな氣持がしたからである。少年は黙つて母の傍に来て坐つた。

四邊には何の音もしなかつた。たゞ折々微かな溜息のやうに、木の葉の散り落つる音は、獨りこの少年の心を悲しましめたばかりでなかつた。青い顔の母にも悲しく思はれた。四角に切り抜かれた窓から、青い秋の空が垂れ下つて見える。青い幕を垂れたやうに、秋の空は、野の末に遠く接してゐた。而してこの廣々とした青い空に白い烟のやうに、雲が飛んでゐた。また黒くなつて突立つてゐる木立も窓の外に霞んで見えた。

54 要治はかうして昵としてゐると覺えず寂寥に體を戦はした。此時彼は今日外で遊んでゐる時分に見た、他の家の母親と其の子供の有様を眼に描いたのである。其の母親の顔の色は紅くて肉附きが豊かであつた。而して其の子供はやはり自分位の年頃であつたければ、母親は何やら快活に笑つて小供の顔を見下し

55 ながら物を言つてゐた。其の子供も、また何の心を他に置くこともなしにのび／＼とした心持で、母親の顔を見上げて話をしてゐたのである。

要治は、未だ會つてあんなやうに平和な心持で日を送つたことが一日もなかつた。彼はいつになつたらあゝいふやうな楽しい賑かな日が送られるだらうかと考へた。しかしそんなことは、どうしても望まれないやうに思はれて、悲しくなつて泣きたくなつた。もし早く此世を去つた父が、二たび、遠く海の彼方から歸つて来るやうなことがあつたならばしらす——到底そんなことは望まれないと考へた。

要治は、かうして晝過ぎには、悲しみに沈んで路傍の草の上を下を見詰めながら歩いてゐたのであつた。……

いつしか日が暮れかゝつた。遠くで鳶の啼く聲が聞えた。窓を透して見える、遙かの地平線に沈んだ夕日の名残が、尙ほうす紅く草を染めてゐたけれど、室

の裡が茫然と暗くなるにつれて消えかゝつて行つた。要治は遂に悲しく居堪らなくなつて、

『お母さん！』と言つて、涙ぐんだ。けれど冷酷にも、青い顔をした母は、まだ黙つて一言もいつてくれなかつた。而して、箆筒の前に坐つて、どんよりとした瞳で、何處を見詰めることもなく虚空の一點を睨んでゐた。

めさぐな

## 五

要治の顔にはいつとなしにまだ幼い者には見られないやうな小皺が寄つてゐた。それは常に母親の悲しい聲を聞いたり、家庭の生活について氣を配るやうになつてからである。

56 灰色の壁に向つて片隅の方に、小さな仕事場をきめて毎日のやうに顔の青い寡れた母は、箱を臺として其の上で提燈を貼つてゐた。其の提燈が二十になる

57

と要治は、これを町の提燈屋に持つて行つて錢と引き換へてもらつて歸つた。常に提燈屋の店頭に坐つてゐる主人は黙つた、愛想のない人柄であつた。要治が提燈を持つて行くと其數をしらべて一つ一つ貼り工合を見たのである。而してよく糊の効いてゐないのがあると、

『こんなのが入つてゐては困るから、よく歸つたらお母さんに言つて下さい。』と叱るやうな聲を出して言つた。

要治は母に對する小言を聞くと自分が叱られるよりもつらかつたのである。店頭立つてゐる自分の耳は熱つて、顔が赤くなつて、而して眼は神経質的に主人が一つ一つ數へてゐる提燈の上に注がれてゐたのである。心のうちで彼はもうあんなやうな糊の効いてゐない提燈が混つてゐなければいゝがと思つてゐた。すると主人はまた一つ其れと同じいやうな提燈をより出して別にはねたのであつた。而して黙つてゐるだけの提燈を一通り檢べてしまひ要治の顔を見

めさぐな

て、

「役に立たないのが二つだけあるから、十八の分だけ差し上ります。」と言つて奥に入つて錢を數へながら持つて出て來た。要治は歸つたら母がなんといふかと心配でならなかつた。而してどうしたら此の主人の心を動かすことが出来るだらうかと考へてゐたが別にいゝ考へも出なかつた。其のうちに主人は要治の立つてゐる前の疊の上に錢を置いたのであつた。要治は此時、

『お母さんは體が悪いのです。』と言つた。

其の聲は感情に激して震いたのである。しかし提燈屋の主人には何んだか言ひ譯のやうに聞えたらしく思はれた。また全く耳に入らぬやうな様子をしてゐた。

58 『歸つたらお母さんによく言つて下さいよ。こんなのが澤山あつてはお頼み出來ませんからつて……』と飽迄も此の少年を嚇して家に歸す積りであつた。

59

要治は仕方なしに僅かばかりの錢を受取ると家に歸つて來た。寺の門を過ぎて杉の森の下を通つて自分の家の見えるあたりに來た時には、何となく心持が暗くなつて足が運ばれなかつた。

青い顔の母親は、要治の歸つた時も悄然として仕事場に坐つて提燈を貼つてゐたのである。而して要治から提燈屋の主人の言つた言葉を聞くこと、さめくこと泣いて誰れに訴へるとなく、

『死んでしまひたい。こんなにしてまで生きてゐたつて何の面白いこともないし、楽しみもないのだから……』と言つて、而して自分の身の上のはかなさを怨んだ。幾年の間かうして、日蔭のやうな生活をして來たいろくの心の苦しさを語つた。要治に向つて、たゞお前があるばかりでかうして生きて來たのだとも言つた。果ては提燈屋の主人の無情を怨んで泣いたのである。

こんな時には、要治は母を慰めて、『お母さん、もう少し私が大きくなるまで



は我慢をしてゐて下さい。私が大きくなつたらきつと働いてお母さんを樂に  
てあげますから……』と言つて、少年の決心を顔色に現はしたのであつた。け  
れど母親は、

『お前が大きくなつて、私を養つてくるれなごゝは、何時のことやら分りはせ  
ん……』と言つて、さながら茫漠として遠い果しもない野原を望むやうなほ  
かない氣持に母は襲はれたのである。少年は二たび母を慰める言葉を知らな  
かつた。こんなやうな淋しい、悲しい日はつゞいたのである。

## 六

60 要治は獨り森の中に来て深く考へ込んだ。村には杉や榛の木の繁つた森が處  
々にあつた。森の中には新鮮の空氣があふれてゐた。すべての草や、樹木が鮮  
かに葉を開いて呼吸をつゞけてゐる。彼は柔かな草の上に坐つた。どうしたら

61 家にゐて毎日面白く賑かに日を送ることが出来るであらうと考へた。秋の日は  
静かであつた。時々小鳥が飛んで来て、頭の上の繁つた梢に来て啼いてゐる。仰  
ぐと頸の周圍の白い可愛らしい敏捷さうな小鳥である。中には半ば黄色くなり  
かゝつた木の葉もあつた。

もはや遠く北海の波の轟きが静かな澄んだ空の下に聞えて來た。少年の心は、  
暗い冬を前に控へてゐることを悟つた。彼はどんな話を母にしたら、母が驚い  
て眼を見張つて熱心に話をつゞけるであらうかと考へた。さう思ふと要治は森  
の中を駆け巡つて何か珍しいもので、曾て人間の眼に觸れたことのないやう  
なものを探し出して、これを歸つて母に語つたならばきつと母は、好奇心に驅  
られ熱心に耳を傾けて其の話を聞くであらうと思つたのである。

少年を家に歸ると、母の傍に行つて坐つた。而して今日森の中で見て來た不  
思議な話をした。

村の東に當つてある森の中に咲いてゐた百合の花には、花瓣が三片しかなくなつた。其の花弁の色は冷かな銀色をしてゐた。要治は珍らしい百合の花だと思つたので歸る時に折つて來やうと思つた。而して森の中で遊んで二たび其の花の有場をたづねて行つた時には、其の花はいつしか黒い地の上に溶けてゐて、其處に白い蛇が一疋渦を巻いてゐた。要治の母に話したのはこんな話であつた。

めさぐな

母は始めて、要治の顔を見た。

『それは不思議な話だ。お前其の花を持つて來なかつのが仕合せだ。持つて來たら指が腐れたらう。』と言つた。

要治は自分の創作した話のうまく行つたのを心のうちで喜んだ。

要治は母がかういふやうに陰氣な話や、不思議な話をするたびに、常とは違つていつになく快活な顔色となつて物を言つたり笑つたりするのを知つた。彼

62

63  
は常に自分がかういうやうな話をすれば二人の間は面白く賑かに日が送れるやうに思つたのである。

それから毎日要治は外をぶら／＼と歩いて珍らしいことを探して歩いた。ある時には家に歸ると、こんな話をした。

某の家に坊さんが黒い衣を着て入つた。暫らく自分は家の前に立つてゐると家の内でお經を読む聲が聞えて、いろ／＼の人々が入入をしてゐた。きつと誰か死んだのだらうなど、言つて話した。すると母親は「それはほんたうのことか？」と念を押して、いつしか仕事の手を休めて考へ込んだ。

『あの家には、他に誰も死ぬやうな人はない筈だ。もしお碌さんが死んだのなら可哀さうなことをした。あの人も自分と同じやうに若い時分から、少しも樂といふことをせずにした人だから……』と獨り言のやうに言つた。要治には、かう悲しく母が言つても何となく母の青い顔に常よりは活氣の帯ばれ

めさぐな

て話振も活々としてゐるのを見て心のうちで喜んだ。母は要治に向つて、いろいろと分るとなく分らぬとなしに其の女の人の身の上を物語つて聞かせた。而して其の日は家の内が賑かであつた。——自分等よりも悲しい運命に支配せられてゐる人が、此の世界にあるといふことは母親の心を慰めたのであつた。

或日、要治は町を歩いてゐるとうす赤い衣物を着せられた囚徒が、鍵に繋がれて行くのを見た。彼は一目この自由を束縛せられてゐる人々を見ると言ふにはれない不安な氣持になつたのである。歸つてからこのことを母に話したが、母には何の反響もなかつた。しかし要治には時計屋の角を曲つて行く、其の赤い人々の一列がいつまでも目に残つてゐた。また小學校の前の道の向ひ筋にいろ／＼の文房具を商つてゐる店があつた。或日彼は、其の店の前に立つて硝子箱の中に入つてゐるニッケルの墨壺や、顔の映るやうに光つてゐるコンパスや、また銀で英語の書いてある鉛筆や、止針のやうなものにさまざまの想像を

めぐらしながら見てゐる時に、後方から黙つて来て、錢を拂はずに品物を持つて行つた少年があつた、彼はこのことが氣にかゝつてならなかつた。家に歸つてから母に其のことを話した。其の時青い顔の母親は険しい目附をして、

『お前が盗んだのではないか？ お前はどんなに欲しいものがあつてもそんなことをしてはならんぞ。』と言つた。また、

『用のない時には、そんな店の前などに立つてゐてはならないぞ。』と言つて叱つた。要治は其れから文房具を賣る店の前に立つて、もはや舶來の美しい品物の上に好奇心に燃える瞳がれの瞳を映することも許されなくなつた。そしてこんなやうな話はすべて母親の興味を惹かなかつた。母親の興味を惹くのは、獨り人間の悲惨な死についてばかりであると知つた。

森に鴉が三つ巢を造つたといふやうな話も母にしたとて、何の反響もなかつた。

たい著しく母の沈鬱をさましたり、喜ばしたり感興を興へたものは死といふことであつた。凶兆といふやうなことであつた。要治は誰か自分等の知つてゐる人が死にかゝつてゐはしないかと、其れを探ぬて村の中をぐるぐると廻るやうになつた。また彼は森の中で半日も、一日も獨り草の上に坐つてゐていろいろな不思議な話を考へて、それを真にあつたことのやうに家に歸つて母に話したこともある。而して僅かにこの頼りない家庭の寞寂が少年の口から話された不思議な陰氣な話や、悲しい不自然な話によつて破られて、母親の感興を呼んで、凄い笑ひと賑かさに二人の心が酔はされたのである。

66 少年は不思議な想像力が發達して、さながら世間にあるらしい話のやうにして、自分の創作した話を巧に母親に聞かせたのである。其等のいろくの悲し

67 い、陰氣な物語りは、病的な母には殆んど世間の出來事と信じられて、かうもこの世の中には悲しい事實が満ちてゐるかと思へ、思はせたのである。

要治は母に向つて、今日村の河に女の乞食の死骸が浮き上つてゐたと言つた。母はこの話を聞いても格別驚いたといふ風をしないで、やはり下を向いて提燈を貼つてゐた。其時、要治の神経は暗い家の裡に死んだやうな空氣の中に眠としてゐるに何んだか堪へられなかつた。何とかして母を驚かさうと考へたので想像力は速かに働いた。而して其の死んだ女の屍が乳飲兒を抱いてゐたと付け加へて言つた。母親が要治の言ふことを疑はないまでに、彼の言ふことは自然で而して悲調を帯んでゐたのであつた。

要治は悲しい、怨めしい、淋しいといふ自然の呼吸を捕へてゐる。感じてゐる。而して彼の言つたことは容易に母親の同感と呼び得るといふことを知つてゐたのであつた。而して彼が母親に悲しい話をしたり、異常な出來事を話した

り、世間の不幸なまた憐れな人の話をすると急に母の顔色が和いで、言葉が優しくなつて熱心に耳を傾けるといふことを知つてから、遂に全くない事件を創作して母親に聞かせるやうになつた。最初少年は、常に何等かこの社會に於ける異常な事件を探ね出して母に報告したいと思つてゐた。母が心のうちでこれを聞いて喜ぶのは、即ち自分にも嬉しかつたからだ。母さへ愉快でゐたなら、家の裡は何となく賑かである。常に賑かな氣分の中に自分を置きたいと要治は思つた。少年のかゝる望みは決して無理な要求でなかつた。かうして家のうちの淋しい空氣は少年の不思議な想像力に不思議な變化を傳へて來た。要治が人の悲惨な話をするを、

『ほんたうに氣の毒なことだ。』と母親は涙を出して返答した。しかし何處にか、顔には喜びの色があつた。他人の死といふことが——苦しい生よりも悲しい死が——母親の心には一種の慰藉と安心を與へたに相違なかつた。

『それからどうなつたか、お前はもつと委しく其の事を知つてゐないか?』と、此時は母は活々とした瞳を見張つて仕事の指頭を止めて傍に坐つてゐた要治の顔を覗き込んで言つた。

或日のこと曇つた頭の重い厭な日に要治は、町から歸つて來た。彼は殊にこんなやうな日を嫌つた。母親の顔が常より青く見えるからである。家に入ると濕りかへつた空氣は心が腐れて行くのを覺えた。要治は、

『お母さん、よく提燈屋に行くおきみさんといふ婆さんが縊死しましたよ。』と不意に言つた。母親は仕事の手を止めて、少年の顔を見て、

『お前は誰から其の事をお聞きだ。』と訪ねたのである。

『提燈屋の主人が、昨夜あのお婆さんが縊死したと言つて聞かせました。』と眞實らしく大膽に言つたのであつた。

急に母親の眼からは涙が流れ落ちた。

『まあ、どうしておきみさんが死んだのだらう……あの人も亭主があつたけれど、やはりよくなかつたので年を老つても苦勞をしてゐた氣の毒な人なんだ。少しも樂をせず此世を去つてしまつて……』と言つて泣いた。この老婆は、母親がたま／＼提燈屋に行つた時にたび／＼顔を合はして、互に身の上話をし合つて知つてゐたからであつた。かうして一日が不安の裡に送られた。少年は氣味の悪い沈黙よりも、何か怖いことでも言つて幾分なりと氣をまぎらして暮らしたかつた。そんなことで此處では少年が虚偽を語つて母親を樂ますといふやうな不自然なロマンチックな悲劇が演ぜられつゝあつた。

要治は遂に自から創作をして母の病的な神經を樂しますことが出来なくなつた。一日彼は森の中に来て冥想を凝して獨り空想に耽つてゐた。

遠く鈍色の疲れた野を越へて、北の方の海から暗い波の音が響いて來た。彼はこの波の音を聞きながらふと頭に天來の感興が湧いて來た。

彼は家に歸つて、母親に對つてかういふやうなことを語つたのであつた。

『今日森の中で私は一人の老人を見た。其の老人は白髪で杖を叩いてゐた。私を見るとお前は、もう近々ちかぢかに死んでしまふと言つた。私は老人を見送ると其の姿は森の中に見えなくなつた。』と語つた。

母親は仕事をするのを止めて、要治に向つてそんなことを言つた白髪の老人はどんな風をしてゐたかといろ／＼と委しく問ふたのである。要治はたゞなんでも其の老人は、滅多に見たことない老人であると語つた。母親はしばらく考へ込んでゐたが、自分の知つてゐる人の死んだ時にも、やはりそんなやうな白髪の老人が訪ねて來たと聞いてゐる。もしや老人が來たのだとすると、お前の身の上に何か變り事がないとも限らない。決してこれから暫らくの間は外へ出てはならないと言つて、要治を自分の傍に近寄せて兩眼に涙ぐんだ。

それから三四日といふものは、母親は要治に注意して眼をば少年の上から放

さなかつた。要治は生れてから今迄になかつた母の愛を受けたのである。こんなことがあつたら、遂に要治は何んだが死なくてはならぬやうな氣がした。虚偽を信じてゐる憐れな母に對しても、自分のかうして達者であるといふことが濟まないやうな氣がした。而してかうして生きてゐるより死んでしまつた方が、きつと母は自分のことを可哀さうに思つて、いつまでも忘れずに、自分の靈魂を可愛がつてくれるだらうと思つた。若しいつまでも自分がかうして何の身に障りもなく生きてゐたなら、きつと母は張合が抜けて、今迄のやうに二たび自分のことを思はなくなるであらう……。

或日要治の姿が見えなくなつた。

數日の後、彼の屍は村の河の中に浮き上つた。其の日、森の中では鴉が啼いた。何となく其の聲は悲しかつた。

## 殺 害

一

おひさに別れてから彼れ是れ一年経つた。また悲しげに落葉が抜髪のやうに降つて来て、すき透つた木枝から海のやうな青い空が覗はれる時節が来た。男は一年振りで新開地へ足を向けたのであつた。彼はうなだれて考へ込んだ。一年といふ月日は煙の消えるやうに影も残さず、また雲の流れるやうに音もなく去つてしまつた。誰の上にも同じいやうに一年は経つたのだ。其れに何の不思議

はないが其の一年のうちに自分は他人の知らない苦勞をして來た。また他人も自からをはなれて人の知らない苦勞をして來たのだらう……かう思つて男は眼を足先から離して寒い風の吹く空漠とした空を仰いだ。而して流れて行く月日の影を見やうと思つた。

害 殺

74

けれど空には灰色の魚の腸のやうな雲が動いてゐるばかりで何も見られなかつた。「時とか、空間とかいふやうなものも別にあるのではない。人々はかうしてあるがまゝの世界の上に生れて來てあるがまゝに動いて死んで行つてしまふのだ。これが人生といふものだ……」と男は思ひかへした。而して彼はてくてくと淋しい黄色くなつた林の下を通つてだら／＼となつた坂路を下りて行つた。地の上は濕つぽかつた。路傍の笹の葉は沈鬱に黒ずんでゐる。彼は地上に隙間もなく落ち布いた木の葉を踏んで、其の乾いた鳴音を聞くと、ふと道端の黒ずんだ笹の葉を見つめて其處に佇んだ。子供の時分に山路を歩いた時の記憶が思

75

ひ出されたのである。此時氣を鎮めて瞳を開くと何處からとなく冷りとして肌に染みる空氣にも木の葉の朽ち行く匂ひにも、地の濕つた其の色にも昔懐しい氣持がした。而して彼は何處へ行つてもかうして大空の下に住む者は同じい秋の景色を見ることが出来ると思つた。しかし今眼に見る是等の景色は何となく自分にとつては他所の景色であると思はれた。廣い地球の上はすべて人間の故郷であるけれど、彼にはどうしてもそんな大きな考へを持つことが出来なかつた。而してもう一度子供の時分に歩いた故郷の山道を歩いて、冷かな地の上に踵を觸れて見たかつた。而して霰まじりの雨の降つた後の水溜りに淋しく青い空の映つてゐる姿を見たかつた。路傍の黒ずんだ笹の葉の上を暗い溪から溪へと吹く溜息のやうな風の渡る音を聞きたかつた。赤い血の滴れのやうな落葉が半分程流れて來た砂に埋つてゐるのを拾ひ上げて、それを顔に付けてシミ／＼と飽かずに眺めたかつた。霰の白く溜つた山路の上に佇んで林を分けて山と山

害 殺



この間に赤く悲しく落ちる入目を今も尙ほ故郷に歸つたなら眺めることが出来るだらうかと考へた。

殺害

男は空想に耽りながら、淋しい細い道を歩いてゐる。兩側には圃がつゞいて、野菜が黄色くなつて枯れてゐる。この都會の郊外に出て見渡すと何處となく疲れたやうな物憂い景色と、静かな濁つた空氣とが望まれたのである。彼は鐵工場で何か鐵板を叩いてゐる音の聞えて來る方へと歩いた。雜木林を出ると明るくなつて廣々とした平野が前に開けて、足許に河が流れてゐた。河の水は青くうるんでゐた。而して寒いどんよとした空の光線に水面を輝かしてゐた。

二

76

過ぎ去つたある冬の夜男はおひさを訪ねて來た。暗い夜でちら／＼と雪が降つてゐた。眞暗な夜は漆のやうに眼も鼻もびつたりと閉いでしまつて、下駄の

77

齒に吸ひ付く泥濘は堅く足を捕へて幾たびか道の上に立止らせた。彼は其時袂からマッチを出して片手に傘を支へながら辛うじて摺つて見た。けれどマッチは濕けてゐて火が出なかつた。彼は心を焦立てながら力を入れて五六本を一固りにして摺つて見た。漸く火が點つて闇の世界が僅か三四尺ばかりの間が照らされたのである。雪はひた／＼と降つて地上に積りつゝあつた。而して晝間荷車が此の道を通つたと見えて深い轍の跡がぬかるみに黒血を出した傷口のやうに光つて見えた。彼は瞳を凝らして睨と其の傷の一端にたどり付いた火光を眺めやうとした時哀れな火はもう消えて、二たび世界は暗黒となつてしまつた。彼は其時しばらく其處に立ち盡して、静かに更けつゝあつた、天地の中に潜んでゐる聲を聞きとらうとした。而して其の嚴肅な聲は性慾に昏み、好奇心に燃えてゐる自分の心に冷かな暗示を與へて覺醒し、遠く自分の心を光りのある世界に導いてくれるであらうと考へた。

殺害

けれど耳を澄したけれど何の音も聞えなかつた。たゞ雪が折々頬に當つて殆んど知覺の失せてゐる肌の上に解けつゝあるのを感じた。彼は其時もう何時頃であらうかと思つた。家に妻を遺して飛び出して來た時の光景などが目に浮んだ。彼は其の時の光景を考へまいと思つた。けれど考へない分けに行かなかつた。妻も人間である。而して同じい感情を持つてゐる。何等かの怨みと怒りと嫉妬とを感じてゐない筈がないのだ。彼は妻が黙つてゐるので人形のやうに無神経であると思つてゐるのは自分が間違つてゐる……けれどすべての女といふものはまた無神経になつてゐられるのでなからうか……といふやうな疑ひも感ぜられた。

此夜男は嚴肅なる自然の中に獨りかうして誰も通らない道の上に立つて、耳を澄まして狂へる心の光明に走る何等かの暗示を聞き取らうと欲してゐたけれど、この大なる暗黒と自然の嚴肅とは情慾に熱して好奇心にそゝのかされてゐ

るたゞ一個の人間を威壓し、畏縮するだけの力がなかつた。然かも肉に飢えてる野獸が夜の靜寂に忍足して山から人里の方へと志すやうに、彼は反省して此儘家に歸らうとは思はなかつた。而して其れから先きまだ幾丁となくつゝいてゐる眞暗なぬかるみの道を根氣よく辿つて行つた。

『もう何時頃だらう……』と男は其ればかりが氣にかゝるやうに、幾たびとなく口の中で言つた。其れは彼の行かうとしてゐる銘酒屋の燈火が消えてゐたらばどうしやうと考へたからであつた。

男は漸く一つの軒燈の火を認めた。雪の解けかゝつた黒い路が、鼠色の闇の底に浮き出て見えた。それは道の分れる角にあつた材木屋の軒燈であつた。家の戸は閉つてたゞたよりなく軒燈の火が寒い風の吹く人通りの杜絶へた往來を幽かに照らしてゐた。彼は淋しく其家の前に立止つて軒燈の硝子に降りかゝつてゐる雪を眺めた。而して寒氣に身戰ひしながら傘を傾けて積つた雪を拂ひ落し

た。男には此のあたりの道は既に幾たびか通り慣れて一種の親しみのある處であつた。彼は其處から一筋の道を選んで此家の角を曲つて間もなく銘酒屋の前に来た。しかしもう戸は閉つてゐた。彼はもはや十一時を過ぎてゐると知つたけれど、戸の際に立ち寄つて隙間から裡を覗いて見るとまだ燈火が付いてゐて人が起きてゐる様子であつた。彼は四邊に氣を配りながら、おどおどした聲で、

『今晚は……』といつて戸を叩いたのである。それは他人にばかり氣兼ねをするために聲が戦いたのでない。自分を淺ましいと思ひ、もし何處かで妻が見てゐたなら嘲笑ふであらうと感じたからである。

80 彼は二三度かうして戸を叩いた。けれど誰も返事をするものがなかつた。今迄動いた人影は急に静つて、全く眠靜まりかへつてゐる様子をして見せた。彼は直ちに家内のものが自分を誰れだか分からぬために怖れを抱いてゐるのだと

81 考へた。もしそれでなければ客に對して斷りを言ふのを嫌つてかうして眠靜つた風を装つてゐるのだと察した。

『おばさん僕だ。……』と彼は強ひて笑ひを造つて先方に打ち解け易い感じを與へやうとした。而して彼は戸の外から聲をかけて自分の怪しむべき人でないことを家内の者に分らせやうとした。此の刹那男は心のうちで彼等に對して肉を漁りに來た羞耻を感じた。たとへ彼等はこれが商買だといへどかうしてまで戸を閉めたものを叩き起す自分の心を卑しいと思つた。けれどまた瞬間に心が變つた。此の場合に反省するよりは寧ろ盲目に進行すべきであると悟つた。

『どうして、こんなに遅くなつてから……』と言つて戸の鍵を外して瘦せた眼のぎよろりとした主婦が顔を出したのであつた。而して辛うじて一人だけ身を竦めて入れるだけの戸口を開いた。彼は黙つて中に入つた。主婦は直ちに戸を閉めて鍵を下した。而して彼を二階の一室に導いて其處の電燈を捻つて明るく

した。

男は雪に濡れた外套を室の隅に投げやつて、寒さに震ひながら烟草に火を點けた。室の中は冷え切つて青白い電燈の光は破れた襖や汚れた疊の上をわびしく照らしてゐる。彼はこの荒顔した女の生活を物語つてゐる一室を快樂の場處と心得てゐる自分を疑つたのであつた。

『おひさは……』と彼は何の遠慮もなく主婦に問うたのである。夜半の淋しい五燭の光りに黄色な顔を照らされた主婦の額際には半生の歴史の暗黒と闘ひに疲れて來た衰へとがあり／＼と刻まれてゐた。彼は是迄こんなに冷かな心持で此の主婦の顔に見入つたことはなかつた。

『ひさちゃん病氣で臥てゐますよ……とても外には出られないけれど兎も角起して來ますから。』と主婦は飽迄笑ひ顔を造つて、其場を立ちかけて、

82 『お誂ひは何にいたしませう……もう遅くて何にもないが……』と言つて男を

見た。其の瞳の光りは鋭かつた。

『酒を熱くして來て下さい。海苔でも何でもいゝのだから……』と言つた。男はいつも此處へ來てかうかふやうなことを言ふのであるが、彼はいつまで自分にこんな遊びがつかげられるであらうかと考へて未來に對して一種の不安を感じたのであつた。

三

其夜は遂に吹雪になつた。男は外の風の音を聞いてゐる時に女が入つて來た。其の前に遇つた時とは殆んど別の人間のやうに女は顔の色が悪かつた。病氣といふのは脚を痛めたのだと言つた。私は直ちに何人からか悪い病氣を傳染して來たのであらうと察した。かう思ふと常の如く女に對してゐて一種の恐怖心はちやうど太陽の面を過ぎるうす雲のやうに興味を減じさせたのであつた。而し

て其の夜に限つて女に益もやらなかつた。それは病毒が女から受ける益から傳染すること怖れたからである。しかし彼の不思議な欲望は益々彼を暗黒へと導いた。やはりこの汚れた女を連れ出して何處へか行かなければ満足が出来なかつたのである。彼は女が烟草に火を點けてくれたのも吸はぬやうにしてゐたけれど、やはり此の女と共に今夜を送るといふことは斷念出来なかつた。此の甚しい矛盾を自からも感じながら、尙ほこの不思議は興味をそゝる本能に打ち勝つことが出来なかつた。

女は青い顔をして彼と對して坐つてゐる。彼はこの病み疲れた女を見て、何時か此の女と共に朝日の東に燃えた美しい朝宿屋を出て、人通りの雑踏した道の上で黙つて分れた時のことを思ひ出した。其時見た女は唇が赤かつた。頭髪に白い薔薇の花を差して、派手な羽織を着てゐて、自分に活々とした快活なチャームのある女だと思はせた。而して自分は長くこの女と關係して見たいと其

時思つたことを心に思ひ出した。今、彼の眼にはこの女が其時の女であるとは思はれなかつた。しかし、たしかに其時の女であつて見れば、やはりこの女にもさういつたやうな過去があつたと思はれなかつた。彼は其の過去の女を愛した。而して長く其の女と關係をつゞけて行きたいと思つた。この女を捨てることは彼の美しい女を、捨てるものだと考へた。

『オイ、お前は今夜己といつしよに出るだらう……』と男は頭から掩へ被せるやうに力のある言葉を女に浴せた。

『妾病氣なんですけれど……』と女はたゞ眠りを欲するより他に何の望みもないといふやうな眼付きをして見せた。

『この寒い雪の降る晩にわざわざお前に遇ひに來たのだ。』と男は偽らずに自分の心のうちを明かに語つたのである。

『あなたさへおよろしければ行きます……』と暫らくして女は言つた。色の褪

めた花を見るやうな氣持の笑ひをした。

男は一人で三四本の酒を飲んだ。酒は火の氣の足りない鐵瓶で温められたと見えて生温るかつた。彼は酔ふかほりに哀愁と不安を心に感じたのである。彼はいつもの橋の上に待つてゐる約束をして女より一足先に家を出た。主婦は眠さうな眼付きをして見送つた。而してまた戸を細目に開けてくれた。彼は二たび其の戸口をくゞると、寒い暗い、雪の降り積りつゝあつた世界に吐き出された。

大きな赤い建物が河の彼方の岸に立つてゐたが、夜は其の建物を黒く見せて周囲を取り巻いてゐる。たゞ淋びしげに青白い電燈の光りが河水に映つてゐる。吹雪は地上に黒く流れてゐる河の上を駈けて、口笛を鳴らすやうに風が河淵に立つてゐる胡桃樹の枝に響いた。男の酒に酔うて一時かつとしてゐた頭は、外界の冷かな風に觸れて、かうして獨り岸に立つて、青白い電燈の光りが水に碎

87 けてゐるのを見詰めてゐる間何處へともなく霧の晴れて行つたやうに遠方に隠れてゐた森が見えて、靈魂を呼び返すことが出来たやうに、だん／＼心が落付いて來て、今迄聞えなかつた天地の聲が耳に響いて來たのである。

彼は橋の上に立つて獨り考へ込んでゐた。雪のかゝつた欄干に身を凭せて、足許を流れて行く水を睨と見落してゐただれど、眞の水の色は見えなかつた。もう五六町も距つた處には闇が濃く塗られてゐて眼を遮つてゐるので、たゞ電燈の光りが映つて水に碎けてゐる處だけがやはりいつまでも美しい漣を立てゐた。

男はかうして此處に立つてゐる間、病毒に感染してゐる女が痛む足を引摺つて、今彼方から姿を現はして來るであらうと思つてゐた。彼はまた此時僅かばかりの金で女の體を束縛出来ることを幸福だとは思つてゐなかつた。而して僅かばかりの金のために苦痛を忍んで黙つて従うて來るものよりは、この同じい

人間を動物視する者の心を悲しく思つた。金のために苦痛を忍ぶ女は果して自分をどう思つてゐるだらう……野獸のやうな人間と思つてゐるに相違ない……其れとも神経の痲痺した墮落の生活を常態と思つてゐるやうな女にはかゝる精神上の煩悶はないのであらうかと思つた。

害 殺

男はこれから女と二人して、あの巷の一軒の家の戸を叩いて起して、火の氣もない寒い天井張りの低い二階の一室に通つて、ごんな人間が臥たか分らないやうな脂と垢に汚れた蒲團の中に入つて、窓に吹き付ける吹雲の音を女と共にたがひに違つた感想で聞かなければならぬのかと思つた。もうすべての好奇心は、この痛ましい想像のために消えてしまつた。其處には悲惨な現實の生活が横はつて見えた。彼は直ちに姿を橋の上から隠したのである。而して其から暫時の後に女が橋の上に来て、うろついてゐる姿を遠くから闇を透して覗つてゐたのであつた。

彼は女の姿が全く何處にか消えてしまつた時にもう一度橋の上に来て立つたのである。而してまた茫然として雪と霰を混じて流れて來た河水に夜もすがら青白い電燈の光りの映じてゐるのを眺めた。此時吹雪が眼の前を過ぎて、闇の中を駆けて去つた。彼はあてなく廣野の闇の裡に迷つてゐる自分の靈魂のために知らず知らず熱い涙が湧き出て頬に傳はるのを覺えた。

其時からちやうど一年あまりの月日は経つたのである。おひさがS町のある銘酒店にゐるといふことを聞いたので、男はおひさに遇つて見たくなつた。而して、かうしてこの前に女を訪ねて來た時の心持と同じいやうな心持を心のうちで經驗しながら、とぼくど道を歩いてゐた。

四

S町は新開地に建てられた安普請の建物の多く立並んだ町であつた。町裏の

低地には雨水が沼のやうに溜つてゐる。而して其處に自然と方々の溝から溢れて流れて来る水が落ち込んでどんよりとした空の光線を反射して鉛色に光つてゐた。

殺 害

空を行く雲が其の浅いしかし黒ずんだ水溜りの上を覗いて己が亂れた不穩の姿を映しながら黙つて去つた。其の水溜りの片側には釣堀場があつた。低地を少しばかり堀つたばかりで周圍に枯れた竹を植ゑてそれに簡単に繩を結び付けて置く。片側はちやうど鳥屋の裏手になつてゐて、鶏や、鵝鳥があひると共に水溜の淵を啼いて歩いてゐた。あひるは平氣で水溜の中を泳いで、其の重い黒ずんだ毒々しい水を飲み、吐き出して搖き亂してゐた。鵝鳥もあひるの跡について浅瀬を卑しげに餌を漁りながら水の中を歩いてゐる。獨り褐色の鶏が時々足をすべらして水の中に落ちかゝつて慌て岸に羽ばたきを打つて這ひ上つた。

其の様がいかにも貧しく醜かつた。其のたびに柔かな黒い土が轉げて水溜の中

に落ちた。

時々小犬が走つて来て是等の鳥の群を驚かす外、一日このあたりには波亂もなく、どんよりとした水溜りの色のやうに單調と物憂い空氣に包まれて、濕氣に満ちた日が暮れてしまふ。こんなやうにたゞ鉛色の靜かな水の面に雲の姿が幾たびか變化するばかりであつた。晝頃になると彼方の製造場の氣笛が無心であるといふことを思はせるやうに響いて、鈍色に見える地平線の彼方へと森や野原を目あてに泳いで行くやうであつた。午後になると何處からともなく汚物や塵埃を運んで來たどす黒く塗つた荷車が此の水溜りから一二丁隔つた處まで引き入れられて低地を埋めてゐるのが見えた。其等の車は力なく田の中に置かれたまゝ休んでゐる。五六人の男がさも怠け者のやうに、また筋肉に働く力が盡きたといふ風にだらりと枯木のやうに立ちながら烟草を喫つてゐる者と其處に石塊のやうに蹲踞つてゐる者が見られた。其等の人々の喫ふ青い乾いた烟

殺 害



草の煙が幽かに上つてゐるのが見える。遠方の木立がもう直に冬が彼方の地平線からやつて来るのを見張つてゐるやうに淋しく悄然として立つてゐた。中には黄色い葉の散り残つてゐるのもあつた。

殺 害

彼方の小高い丘には常磐木が鬱陶しく灰色の空氣の裡に黒く染み出てゐる。其のこんもりと盛り上つてゐるのが重い憂鬱の闇のやうに見えた。水溜りの傍に細い道が付いてゐる。其の道を歩いて狭い家の間を抜けると町の通りに出ることが出来る。町は町幅が狭くて低い家が出たり入つたりして不揃ひに立並んでゐた。支那人相手の料理屋や、理髪店や、雜貨店とが入り混つてゐて晩方の乳色の煙が此の低い狭苦しい町の建物を懐しげに色彩つてゐる。一品料理屋の前を通るときは古い油の臭ひがする。牛肉屋の前を通ると血の出てる殺されてから間もない動物の片脚が硝子戸の内に吊下つてゐる。支那料理屋の看板のかゝつてゐる店の前を通ると赤い壺や、青い壺が差し出た窓際に並んでゐる。

烟草屋と貸本屋とを兼ねた小店の上り口には顔を眞白に塗つた若い女が怠屈さうにして夕暮方の往來を眺めてゐる。

町はぎく／＼と入り曲つてゐた。而して至る處にぬかるみがあつて、其のぬかるみには荷車の轍のぐねつた跡がついてゐる。中には水の澄みきつてゐる處もあつた。其處にはこの自然の静寂の悲しみが光つてゐる。

町端れの空には杉の木立が見えたが其の杉の木立の邊にもうす青い夕靄がかゝつてゐる。兩側の町屋の家根を流れてゐる乳色の煙は、此の町に住む人々が家毎に夕飯の仕度をする煙であるがこの新開地の生々しい色彩と不調和な感じを幾分なりと柔げてゐたのである。

男は河について土手を歩いて來た。而してこのS町を遠くから眺めたのである。彼の足の下を流れてゐる河の淵には葦や、薄や、其の他の雜草の葉が赤く枯れて、また胡桃樹の葉が黄色くなつてゐた。斯の如くすべての自然は凋落し

殺 害

かゝつてゐる。この大きな自然の凋落しかゝつてゐる景色を背景としてS町は地面の上に家と家とがごちや／＼となつて固つてゐる。其處にいろ／＼の生活を送つて来た人々が集つてゐることを思はせた。中にはちやうど大空を何處へどなく吹き渡る力強い嵐の來るのを待つて散らうとしてゐるこの黄色くなつた枯葉のやうに、運命のまゝに、何の望みもなく、何の反抗もなく、しかも體が病み疲れて其の日其の日を茫然として暮らしてゐるやうな女もあらうと思はれた。

男は道を歩きながら一年前に別れたおひさがある料理店にゐるといふことを聞いて、其の女を見るのを楽しみに思つてゐる。彼は其の女がどんな風に變つたかを知りたかつたうちにも幾分かまた怖いやうな氣持がしたのであつた。男はだら／＼となつた坂を下りていよく町に入らうとした時、今自分の歩いて來た河の堤を見送つたのである。河を隔つた、彼方の雜木林には眞赤な色彩が黒と黄色との間に混つて、油畫を見るやうに強烈な色彩を浮き出してゐる。

而して長く目も遙かにつゞいてゐる、河堤の上の小道は遠くの村里の方へと連つてゐるので、其の堤を歩いてゐる人の姿が小さくなつて見えた。また車を引いて行く馬の影が霞んで見えた。此の瞬間にだん／＼と遠い方から、夕暮の靄が次第に濃く流れて來た。鴉が彼方の森の方へ啼きながら、廣々とした野原の空を飛んで行つた。水車場から車の廻る音が夢のやうに靜かな天地の胸に小さな脈を打つてゐるやうに響いて來た。——これがまさに永遠に消えんとしてゐる一日の暮方の景色であつた。

男はなんだか知らぬ田舎に行つて、かうして茫然として知らぬ土地の一筋の道の上に立止つて、全く新しい自然の啓示を驚きの瞳を見張つて眺めてゐるやうな氣持がしたのであつた。遠くの森の方で鐘の音が聞えた。

男は町へ入ると、私立大學校の生徒が歸る頃と見えて、黒い洋服に四角な帽子を被つた若者が白い息を吐きながら、手にインキ嚢を下げて急ぎ足で幾人と

なく摺れ違つて過ぎた。町には其他いろ／＼の人が急しさうに通つてゐた中には、夕方我家に歸る仕事師などの群があつた。男は過去に於て學生の生活をして來たことがあつた。だから學生を見た時にふと心の中に、この學生はまだ是れから幾年窮屈な講義を聞かなければならぬのだらうかといふやうな考へが浮んだ。……彼はまた眞面目に學校が人生といふものを學ぶために果してどれだけの力があるものだらうかと考へた。けれどこんな問題を考へたつて仕方がないやうにも思はれた。……

男は夕暮の町の中を心のうちでおひさのゐる料理屋を探ねながら足にまかせてぶら／＼と歩いてゐた。まだ彼は料理屋に上るのには少し時刻が早過ぎるやうな氣がしたのを感じた。而してふと一軒の玩具屋の前を通つた時に思はず其の店の前に立つて考へたのであつた。

まだ燈火の點いてゐない玩具屋の店頭には箱の中にいろ／＼の金屬製の玩具や木造りの玩具などが入れられてあつた。赤、紫、青ととり／＼に色づいてゐる。柔かな鼠色の夕暮方の光線の中に包まれて黙つて昵としてゐた。中でも金屬は痛々しいやうな弱い輝きを放つてゐる。此時男は是等の玩具を見て家に待つてゐる自分の子供のことを思ひ出したのである。

また彼はこんなことを思ひ出した。夏の暑い頃であつた。妻が一人の子供が重い熱病にかゝつたために子供の付き添ひとなつて病院に行つてゐたことがあつた。家には四歳になる男の兒を残して置いた。彼は其の子供と二人して幾日かの長い間留守をしてゐなければならなかつた。其れ以前には彼はあまり子供を可愛がる方ではなかつたけれど、妻がゐなくなつてから毎日晚方になると一人淋しがる子供を見て哀れに思つた。彼は淋しがる子供の手を引いて家を出て町を歩いたりなごしたのである。子供は馬を怖れた。犬を見ると泣いたりした。

而して町の中を歩いてゐる間にも幾たびか子供は物に驚いて泣いたのである。

其時彼は泣く子供を抱き上げた。彼は心のうちでこの臆病な子供を憐れんだ。夕暮方の紅い入日の名残りが遠く町の西の方に沈んで、其の下の道について電信柱が點線のやうに連つてゐるのを見た。彼は子供と二人して其の遠い西の方の景色を眺めた時、この何となく哀愁を催うさせるやうな景色が、こんな幼ない子供の眼に映る時どんなやうな感じをさせるであらうかと考へた。而して彼は何か子供の心を慰めるやうな玩具を買つてやらうとあたりの店を見廻したのであつた。けれどこのあたりの塙末の町には一軒も玩具屋が見當らなかつた。

彼は家に歸ると子供を眠かし付けてから急いで子供の眼を醒さぬうちにと賑かな町を差して走つて行つた。而して玩具屋で木で造つた汽車を買つて來た。彼は其れを蚊帳の中に眠てゐる子供の枕許に置いたのである。子供は母親がゐなくなつてから夜も安らかに眠らない時が多かつた。夜中に一人眼を醒して枕

許にあつた汽車を見付けて喜んだ。而して一人で黙つて床の上に坐つて疊の上に其の汽車を動かして見て遊んでゐた。蚊帳の上に點つてゐる電燈の光りはこの子供の夜中に遊んでゐる姿を照らしてゐたのである。彼はまたいろ／＼のことを考へてよく眠らなかつた。而して眼を細く開けて、子供が玩具を見付けて喜んで遊んでゐるのを見てゐた。彼は此時聲を出して子供の心を驚かしたくなかつた。而して子供のすることが憐れに見えて、獨り心のうちが悲しかつた。彼はこれから後いろ／＼の玩具を買つて來て子供にやらうと思つたのであつた。

けれど彼が子供を眞に哀れに思つたのも其の當時のことであつた。妻が家に歸つて來てから、二たび彼は子供のことに對してあまり考へなくなつた。たゞ其後にもたび／＼其の夜のことか思ひ出された。其の時彼は心のうちで今度自分か町へ行つたなら、必ず何か珍らしい子供の喜びさうな玩具を買つて來てや

らうと思つた。けれどさう思ふことがあつても、町へ出るとつい忘れて買つて来たことがなかつた。

彼が夏の頃に子供に買つて来てやつた玩具の汽車は壊はれて、車が取れたり、烟突が折れたりしてしまつた。而して子供の玩具箱の中に入れられたまゝになつてゐた。子供は前の如くそれを取り出して遊びもしなかつたのであるが、それでも稀れには思ひ出したやうに其の壊れた汽車を出して遊んでゐることがあつた。彼は其れを見た時に、

『こんど町へ行つたら好い玩具を買つて来てやるぞ。』と子供に言つたのである。其時傍にゐた妻は、

100 『家のお父さんは、ちつとも子供のことなんかかまつては下さらん……』と誰に向つて言ふことなく獨り言のやうに言つた。此の言葉は男の耳には自分が時々町へ出てゐるんな女と關係したり、或は泊つて來ることもあればまた酒に酔う

て夜遅くなつてから家に歸るやうなことがあつても、家に待つてゐる子供のために玩具一つ買つて來たことがないと怨んで言つた意味にとれたのであつた。しかし男は黙つて苦笑してゐるより他に言ふべき言葉が見出されなかつた。

今男は其の時の妻の言葉を思ひ出した。また、家の裡で壊れた玩具を持つて淋しく遊んでゐる子供のあることを思ひ出した。而して日頃の家庭の寒い、貧しい生活を目に描くにつけて、かうして自分が女を探ねて町を歩いてゐることを甚しい矛盾のこのやうに考へた。この矛盾を自分のなすべき務めの一つであるやうにどうしても考へなければならぬ自分といふものを考へると、彼は自らの心の執着を呪ひ、今更生きて行くといふことの苦しみを思はずにはゐられなかつた。

『金の價ひを知らなければならん……自分といふものをもつと修養せなければならん——』と彼は心のうちで言つて眞に足許の地面に身を投げて泣きたいや

うな思ひがした。……自分のかうした矛盾した行爲は必しも自からの快樂を追はんがためばかりでない。人間として生れて来て、人生といふものを知らうとする悶えである如くも考へた。

殺害

とつくに男は玩具屋の前を立ち去つてゐた。而して道を歩きながら、何時しかおひさのことを考へつづけてゐた。……自分はこれから後長くあの女と關係をつゞけて行くやうになつたら、末にどうなるであらうか……といふやうなことも考へた。また自分がこれぎりあの女に遇はなかつたならば……もしあの女の此町にゐるといふことを知らずにゐたらば……自分はあの女と去年の冬別れたぎりの記憶を長へに頭に残してゐるばかり、いつしか其の記憶もうすれて、その女の顔も忘れてしまつたであらう……偶然にも其の女が此町にゐるといふことを知つてから追懷は再び胸の裡に蘇生つた。而して其の懐しきは再び自分を彼女の處に引き付けるのである。これから先き何等かの大きな事件に出

103  
遇はなければ、恐らく自分はあの女と別れ、あの女を思ひ切ることがなからうといふやうにも考へた。

男はいつか狭苦しい横道を入つて、女のゐると聞いた小さな料理屋の前に立つてゐた。料理屋の入口には紺色の暖簾が下つてゐて、前には柳の木があつたが葉の色が黄色くなつてゐた。而して耳を傾けると女の聲などが家の中で聞えたのであつた。軒燈には火が點つてゐたけれど、まだ道を歩いてゐる人々の顔はよく分つたのであつた。やはり此の邊の細い道の上にも、家根の上にも青白い夕靄が淡く立ち迷つてゐる。通る人々の中でこの家の様子を知つてゐる者が、料理屋の前に立つてゐる男の顔を意味ある眼付で覗き込んで行つた。

男はまだおひさがこの家に来なかつた時分に遊びに来て、この家の二階で他の女を相手にして酒を飲んだことがつた。だから男にはこの家は始めてはなかつたけれど、彼は何となく胸をぎく／＼として柳の木の下をくゞつて暖簾を

殺害

上げて入つた。入る時は彼は心のうちで自分が再びこの戸口を外に向つてく  
 いる時にはもうおひさと熱い握手を済ました後であると思ひながら、何等かの  
 希望を胸の底に感じてゐたのであつた。而して彼は知らぬ他の女に迎へられて  
 梯子段を上らうとしかゝつた。其時ちやうどおひさが臺所から膳をさゝげて下  
 の座敷に行かうとしたので二人は顔を見合はした。男も女も思はず赤く顔が熱  
 つた。男は女の慌てたやうな顔付を眼に残しながら多少の満足を感じて黙  
 つて其儘急ぎ足に梯子段を上つてしまつた。しかし彼は何となくこの場合他の  
 女に馴々しく話するのを憚つた。而してやはり心のうちでおひさがどうするだ  
 らうかと知らぬ風を装つて見てゐたかつたのであつた。

## 六

男は二階の四疊半に通つた。女は男を其の室に案内すると下へ降りて行つた。

入れ替つて女將が上つて來た。男は大膽におひさを呼んでくれいと女將に言つ  
 た。

『はい直に來ますから、今他に一人お客がありますから、少しお待ち下さい……』  
 と言つて女將も下に行つてしまつた。男はしばらく煙草を喫ひながら獨り  
 壁の柱に脊を凭せかけて茫然として何といふことなしに考へ込んでゐた。其の  
 室は梯子段を上ると直に脇の四疊半である。一方は障子がはまつてゐて窓にな  
 つてゐて表口の方に面してゐた。此處から入る光線が此の狭い室を明るくして  
 ゐた。二方は灰色の壁であつて、一方には破れた襖が閉つてゐて、其れを開け  
 閉てして梯子段を上つたり下りたりした。男は壁を後にして此の襖の方を眺め  
 てゐた。其の襖は黄色な紙で貼られてゐた。而して引手が一方だけ落ちて其處  
 の紙が破れて下の白い新聞紙が露み出てゐた。

灰色の壁には掻きむしつたやうな幾つかの穴が明いてゐる。男は一つ一つ其

の穴に心を注いで見詰めた。而してこの壁に物を突き當てた跡のやうな穴がどんな機會に出来たかといふことを考へてゐた。其他にも壁の上に無数の小さな傷が付いてゐるのである。それは男の客が爪で故意に付けたものとも思はれた。若しくは女が付けたものとも思はれた。けれどもまたそんなことをする理由がないとも考へられた。

男は天井を仰ぐと其處に五燭の電燈が下つてゐた。其の電燈の白い硝子製の暈には埃がかゝつてゐる。彼はなせ多くの女供が此家にゐる癖にこの電燈の暈の埃を拂ふものがないかと疑つた。而して彼は女供の物憂い疲れた體は、こんなことをするのも大儀に感ずるのである。たとへ彼等に氣が付いてもする氣にはなれないのであらうと思つた。男は尙ほ暫らく眼を天井張に向けてゐた。而して其の煤けてゐる板を眺めた。たゞ何となくさびしい暗い感じがしたばかりであつた。

次に男は眼を鳴居に馳せて其處に幾本ばかり釘が打ちつけられてゐるかと檢べて見た。少時の無聊がいろんな空想を産んだのである。彼は其處には女の着物がだらりと赤い裏を返してかけられたであらうと思つた。彼は空想畫を目に描いて胸が躍つた。しかし釘は僅かに二本しかなかつた。而して其の釘はいづれも小さな釘で赤く錆が出てゐた。其釘には何となく長い間なまめかしい女の着物がかけられはしなかつたといふやうな氣持がした。

此時男は後方の壁を見上げて、頭の上の鳴居に小さな赤い花簪の差されてゐるのを見付け出した。其の花簪はアネモネの花を模造したものゝやうに赤かつた。而してこの小さな赤い花は、夕暮方のぼんやりとした銀色の光線の裡に黒ずんで見えたのである。男は貴重な物を見出したやうに胸を轟かして起き上つた。彼は其の花簪を壁から抜き取つて直ちに鼻に付けて匂ひを嗅いで見た。而して此の花簪の持主は誰であつたかを知らなかつたけれど、其の持主を若い女



として其の面影を偲ぼうとしたのである。しかしもう其の花簪は長い間其處に差されたまゝになつて、誰れからも忘れられてゐたと見えて、油の匂ひも失せてゐた。其の人の移り香も消え残つてはゐなかつた。

害 殺

男は其の花簪を手に持つて金屬製のピンを眺めた。もう黒く塗られたピンの尖にも赤い錆がはじめてゐた。恐らくこの簪を差してゐた女は、とつくに此の家から出て他處へ行つてしまつたのであらうと思はれた。こんなやうな女で三月と一軒の家に勤めてゐるものは稀れであつたから……。而して此の簪の持主と自分は永遠に相見ることが出来ないだらうと思つた。

男は花簪を壁の同じい場處に差して置いた。彼はまた其の下の處に坐つて柱に脊をもたせてゐた。けれどまだ自分の待つてゐる女は梯子段を上つて來なかつた。

其の中に音もなく、力もなく頭の上の電燈がうす靄を破つて花の蕾の開いた

やうにほんのりとした弱い光りを投じた。男はもう日が全く暮れてしまつたことを心に確められたやうな氣がした。而して暗愁を含んだ眼で表に面した障子を見守つた。紙の面がぼんやりとす暗くなつて、淋しい物哀れな秋の夕暮方の氣分が、此の室の内と外に漲つてゐるのを覺えた。彼は今頃子供はどうしてゐるだらうかと思つた。また妻や子供が自分のことを思つてゐるだらう……けれど自分が今一人此處に來てこの室にかうして女を待つてゐる姿を妻や子供の眼に描かれやう筈のないことを思つて、何となく良心に對して濟まないと感じたうちにも安心がせられたのであつた。

彼はまた是迄幾人の男が此の室に來て女と戯れたであらうと考へた。而して生活のために、もしくは本能のために暗い這ひ上ることの出來ない淵に沈んで其處で生活の地を見出した女等が其の日を送るために、此の一室を戰場として偽り、媚び、虚飾、矯態、卑猥、淫逸、あらゆる人生の最も醜き方面を露骨に

害 殺

演じた處だと考へると、彼は好奇心に燃えた眼を輝かして一室の裡を見廻はしたのであつた。たゞ荒れた空虚の室の中は冷かな空氣に占領せられてゐた。而して下の白く一面に摺れ切れた畳の上には彼等の頭を爛らした悪酒の流れた跡

害 殺

や、焼け痕や、いろ／＼の染みが黒くなつて汚してゐた。彼は注意深く其等の染みの上に眼を晒らして思ひをこれに潛めながら、暫らく黙然として何事を考へ込んでゐたのであつた。

『これから先き自分は幾たび此家に来るだらう……而して何時自分は全く此家に來なくなるだらう……其の來なくなつた時には自分はどんな境遇に居る時だらう……』と彼はさまざまの空想に耽つたのである。

七

110

此時不意に彼の靜かな瞑想を破るやうな騒がしい罵り聲が梯子段の下の處で

111

聞えた。男は其の聲に耳を傾けたが、直ちに醉漢が女供を相手にして何事か言ひ争つてゐるのが分つた。けれどすべての事情はよく聞き取ることが出来なかつた。

『いや己はごうしても上る……』と醉漢はよく呂律のまわらぬ聲で叫んだ。其の客の着物を捕へてゐるらしい女供は口々に、

『だつて聞かなくちやいけませんから、少し彼方の室で待つてゐて下さいよ』  
『ねえ、あなたは酔つてゐらしやるんだから、もう今日はお歸んなさい。而してまたゐらつしやい……』など、言つて無理に醉漢を押し止めてゐる様子であつた。

『また來やうが來まいが己の勝手だい。貴様等はいらんことをしやがねい……』と醉漢は怒鳴つた。而して前に塞がつてゐた女供を突き退けて梯子段に足をかけやうとしてゐるやうな様子であつた。

害 殺

男は昵として柱に脊を凭せたまゝ耳を傾けて下の様子を聞き取つてゐたが、女供が力が負けて酔漢に押し倒されさうになつてゐる様子が目に見えるのであつた。而して此の事件が何となく自分に關係あるものゝやうに感じられた時彼は言ひ知れぬ不快な黒い幕が眼の前に垂れ下つたやうに心が塞がつた。而して酔漢が今にも此處に上つて來やしないかといふやうな不安を感じた。刹那、彼は何も自分が酔漢によつて襲はれるやうな理由のないなどを考へた。しかしおひさに關して何等か怖い誤解が生じないとも限らないといふやうな疑ひが抱かれた。彼はかうなつてはたゞ黙つて運命に身を委せるより仕方がないことを知つた。一刻先きも見得ることの出來ない人間にとつて未來といふものゝ暗黒と怖しさが始て痛切に感ぜられたのであつた。

男の胸は慌しく轟いて自から鎮めることが出來なかつた。けれど彼は強ひて氣を落付けて不慮の場合になすべきことを考へやうとした。而して自分のゐる

室が直ぐ梯子段の端であつたことを甚だ都合悪しく考へた。たとへ酔漢が自分に關係なくして上つて來たとしても、無意識に酔漢は先づ此の室の襖に手をかけて開けるだらう……而して始めて此の室に人のゐることを知るに違ひない。恐らく誰でも眞に酒に酔つたものは精神が錯亂して自省の力を缺いてゐるものだ。酔漢は黙つて此室から出て行く譯がない。必ず自分を相手として何事かを言ひかけるだらう……彼はどうしても自分が禍を免れることが出來ないやうに考へた。

男は瞳を凝らして梯子段の上り端となつてゐた、自分の坐つてゐる室の黄色な襖を睨んでゐた。其の黄色な破れた襖は、何等か近き未來に此の裡で起らうとしてゐる凶い事件を豫知させやうとしてゐるやうな不安な感じを與へた。彼の眼にはちやうどこの黄色な襖が一面に大きな一つの瞳となつて此方を見詰めて厭らしく笑つてゐるやうに思はれた。男はもし酔漢が此の室に入つて來たな

ら……自分は場合によつたら怒鳴り付けてやらう……而して抵抗して来たなら  
捻ぢ伏せてやらう……もし二人が格闘して危く思はれた時には……と彼はこゝ  
まで考へて思ひ悩んだ。

突然、酔漢が梯子段を荒々しく駆け上つて来る足音が聞えた。男が豫期した  
如く瞬く間に其處の入口に立つて瘦せた眼のぎよろりとした無頼漢が襖を開け  
て彼の顔を睨んだ。

『なんで其處を開けるんだ。』と男は其處に刃ぬ上つたやうに身を起して怒鳴つ  
た。彼の過敏となつてゐた神経は忽ち酔漢の異常を語つた眼付きに觸れた時火  
花を散らしたのであつた。而して男はかう怒鳴ると殆んど機械的にづか／＼と  
襖の處まで進んだ。酔漢は急に落付き拂つた。而して底氣味の悪い笑ひを漏ら  
して構はず室の裡に入らうとして敷居を跨いだ。男は飽迄酔漢の途を立ち塞い  
で、両手に力を籠めて襖から室の外に酒臭い體を押し出さうとしかゝつた。

男はこの刹那たゞ消極的に抵抗を試みて、酔漢を相手に喧嘩をしても仕方が  
ないと思ひ返したのである。其の方が利巧な仕方であると考へた。此處にゐる  
女達に對しても後から批難を受けるやうなことはないと考へた。また事件が過  
ぎてからも後悔をせずに快い平和の氣持でゐられると考へた。而して彼はたへ  
ず自分のなしつゝあつた行爲に對して敏捷なる想像を頭の中でめぐらしてゐ  
た。この刹那彼の視力が男の手許に届いた時は、もう遅かつた。電光の如く疾  
かに突き出した七首に男は身を交はす隙がなかつた。短劍の切尖は着物の上か  
ら脾腹のあたりをグサリと突き立てた。男は冷覺を感じた。次に非常な苦痛を  
感じた。忽ち眼が昏んで來て息苦しくなつて其處に倒れた。けれど頭の中でこ  
の傷はたしかに心臓を避けたが肺を犯したらうか……これで自分は今死ぬので  
なからうか……と考へた。最後に彼は拳に満身の力を入れて酔漢を擲らうと思  
つた。けれど其れはたゞ頭に思つたばかりで手を動かすことも出来なかつた。彼

は酔漢を梯子段の上から突き落さうと悶搔きながら起き上つた。酔漢は血に染つた七首を懷中に收めて身を退いた。其時に彼の體は其場に前のめりになつて倒れてしまつた。すべてこの慘劇は一分間よりは長からぬ急速の間に演ぜられた。次の瞬間に男は下から駆け上つて來た女供の聲を聞いた。しかし其聲は非常に遠い處で言つてゐるやうに聞えた。同時に甚しく痛む傷口から血の流れ出る温味を肌を感じた。女供の驚いて呆氣にとられて罵り騒いでゐる聲の中にはおひさの聲も混つてゐたやうであつた。けれど彼はもうおひさのことは思つてゐなかつた。たゞ此時心の眠には壊れた汽車を弄んでゐる子供の姿が浮んで來た。彼は其れを見て冷たく青白くなつた顔に微かな笑ひを浮べた。次の瞬間には、彼は眼を閉じて、全く意識が遠くなつてしまつた。

S町の柳の木の門口に立つてゐる料理屋の前には、「人殺しがあつた」と人々が口々に罵りながら夕闇の中に集つて來て、黒波のやうにうねりを打つた。

## はこやなぎ

はこやなぎの葉が白い裏を見せてゐる。河面を何處からともなく渡つて吹いて來る風に搖られて、細かな葉がひらくと躍つてゐる。其の細かな柔しげな葉のひらくと震へてゐるのは痛ましい秋の來るのを知つて嘆いてゐるやうにも思はれた。また無心にあるのを風に翻られて嬉しげに笑つてゐるやうにも思はれた。この都會の午後の景色を見てゐる人の心には、一種の淡い悲しみが感じ

られたのであつた。

はこやなぎは河の曲り角の岸に立つてゐた。静かに河の水が青々として街の中を流れてゐる。其の河面の上を掩ははんばかりに垂れ下つてゐた。長い黒い頭髪が懐かしげに黙つてゐる顔にふりかゝつて接吻しやうとしてゐるけれど其處まで達しなかつた。而して怨めしげにいつまでも青い河の顔の上を撫でやうとしてゐるやうに思はれた。風の吹くたびにさゝやかな音を立てゝゐた。

河の兩岸は廣々とした往來であつて、いづれも道を前にして家が葬々と立ち並んでゐた。一方は人が通るだけの道であつたけれど、一方は、レールが深傷の如く地面に喰ひ込んでゐて電車が走つてゐた。電車はたへず闘ひに疲れた獣のやうなうなり聲を立て、日に幾回となくこの道の上を往來してゐたのである。

このあたりは常にかうして賑かであつた。而していろくの人々の活動する

有様が眺められたり、また其等の異つた色彩や、一つ一つ異つた氣持を現はしてゐる物音を聞きとることが出来たのであつた。

しかしはこやなぎの立つてゐる處には自から静かな、忘れられたやな世界が見出されたのである。活動してゐる空間の裡に産れたよごみといふやうな場處であつた。僅かに五六歩を隔て人々の通つてゐる道の上に出るけれど、下を向いて何事か考へながら歩いてゐる人々はこのはこやなぎの處まで來るものがない。極めて稀に閑な人がこの柳の木に立つて、下を流れて行く水を眺めてゐることもあつたけれど、其の人も何か他のことを思つてゐるので、此處にはこやなぎがかうして幾年の間誰を待つとなく立つてゐるといふことを明かにはつきりと知つてくれる程のものはなかつた。はこやなぎは獨り河面を渡つて吹いて來る風に揺られて、一日静かにさやかな音をたて、弱い日の光りに輝きを放つてゐた。

もう秋であつた。一雨を浴びる毎に桐の葉が長い莖と共に抜髪のやうに黒い濕つた地面に落ちて来る頃であつた。しかし都會の建物を掩ふてゐる悠々とした空は晴れてゐて、水のやうに色は青かつた。何處を探ねても雲の影すら見えない。其の空をほんのりと黒く染めて、遠くのある製造場の烟突から煙が上つて消えてゐるのが見えた。其れもこのはこやなぎの木の上つてゐる處から望むことが出来た。

今、走つて來た電車は一種神經に刻み込むやうな鋭い音を立てゐる。而して曲り角に來た時に火花を散らした。黒ずんだ、たるんでゐるゴム管のやうな線とキリキリと廻る小さな車から青い火花が出て、人間の視覺に一種の痛みのある刺戟を與へて電氣の力といふものを、これを見てゐた人間の頭腦に意識させた時、其時車掌が何やら言つた。其の聲がカラリとした空の何處かに消えてしまつた。ちやうど午後三時四十分頃。

彼方に危険の標示の赤い旗が閃めいてゐる。はこやなぎは過ぎ去つた夏の日のことを考へてゐた。小さな掌で、其の白い幹を撫で、中學の制帽を被つた少年が河面を見詰めて、

『こゝにこんな涼しい好い處があるよ。』と言つた。

夏の赤い日の腫が河面に赤い焼點を印して動かなかつた。少年の眼は其の赤い日の腫を見詰めてゐた。其處には河水が脈搏のやうに動いてゐた。遠い希望が溜息を吐いてゐるのを見た。少年は靜かに耳を傾けて、其の希望の溜息を聞いた。遠くの遠くから懐かしい音色が甲斐絹のやうな色をした眞夏の空に響いて來た。而して少年はまだ幾日も休暇の残つてゐることを心に思つた。またこんなことを考へてゐた――

來月になつたら母と共に汽車に乗つて遠く都會を離れて、ある山國にある温泉場に行く。其時眞夏の高原の中に家根の光つてゐる淋しい停車場も見るであ

らう。それ等が二たび學校へ行く迄の間に見られるのだ。幾百哩の遠い處へ行つて歸つて來るといふことが不思議なやうであつた。

其の少年の白い頬の上をうす青く色彩つたはこやなぎの細かな柔かな葉は今もなほ枝に残つてゐる。而してやはり青々と靜かに流れて行く河の面を掩ふやうに枝は垂れ下つてゐる。

赤い焼き付けるやうな瞳を河の面に映した太陽は靜かに大空の路を獨り黙つて歩いて、南の方へと歸つた。夢のやうに月日は音もなく流れてしまつた。はこやなぎは水が少年の姿を其面に幻の如く描いてゐるやうに思はれたけれど、何時其の少年は二たび此處に來るといふあてもなかつた。

たゞ遠くの烟突からは煙が、あのやうに夜が明けると日の暮れるまで黒い旗のやうになびいてゐた。かうしてゐるうちにはこやなぎの葉はだん／＼下の方から色づいて來た。

## 二

誰も自分の他にこのはこやなぎの葉が白い裏を見せて、風に吹かれてゐる有様を見ながら、深く考へ込んでゐるものもないのに、獨りKは河の岸に立つて心ありげにはこやなぎの木を眺めてゐた。

夕日に色彩られて木立は赤い衣を着たやうに沙金のやうな光りを浴びてゐる。街も、流れてゐる水も赤かつた。而して木の葉が微かな風に戦へてゐた。木の葉は秋の來たのを知つて悲しんでゐるのか、もしくは黄昏の光線を浴びて笑つてゐるのかとKは心のうちで思ひながら、木の葉を見つめてゐるうちに、何となく木は無心でゐるのだと思はれた。

何となればKにはまた來年の春になれば木は新しい芽を萌くのである。今年の秋に木の葉が散つたとて決して木の最後でなからうと思はれたからである。



たゞ刻々に過ぎつゝあつて決して二たび同じい時と處に歸つて來ない人生は、慌しく動いてゐる人々には感じられないけれど、しんみりとしてこれに考へ到つた時は淋しい、悲しいものであつた。

Kはかうして木の傍に立つて虚心である間にも、耳には電車の響きを聞いた。而して往來を人が行き、黄色な電車に人が乗つて走つてゐる有様を見た。Kはもう二たびこれと同じい人生の活動する有様をこの地球の上に見ることが出來ないと考へた——かうして小止なく動いてゐるのが人生の姿であることを悲しく思つたとして何の役にも立たないといふ様な氣持にもなつた。

此時活動寫眞の廣告の一行が紫の旗と赤い旗とを建て、太鼓を鳴らしながら悲しいやうなまた勇ましいやうな喇叭を吹いて一つの灰色の横町から出て、電車道に添ふて彼方に向つて歩いて行つた。

其の方には赤い落日が建物の間に沈んで、美しい雲の飛んだ廣々とした空が

望まれた。樂隊の一行はだん／＼小さくなつた。其れを見送つてゐるうちに、いつしかKの心は其樂隊の音色に誘はれて彼方のまだ日の暮れない、遠い空の方へと馳せて行つた。まだ自分の未來には彼の若かりし日のやうに多くの興味と冒険と自由があるといふやうに感ぜられたのである。彼はまた自分の年が人間の一生としてまだ半分位にしか達してゐないことを思つた。まだこれからいふろんな多くの經驗が得られるやうな氣持がした。しばらく其の樂隊の音色と心は連れ合つて町の上を驅けてゐるやうないろ／＼な色彩を見てゐる心地がして愉快を感じてゐた。

次の瞬間に電車が自分の傍を厭な、濁つた叫びをあげて通つた時にKの心は、高い處から地面に轉げ落ちて來た。それはどんよりとして灰白く光つたレールの一端を見たからであつた。而して沈鬱になつて、陰氣になつた心持はごういふやうにしたら、今の生活より樂な面白い目が出るだらうかといふことを考

へたからである。すると何處からともなく『いつまで経つたつておなじいやうな生活しか見出されない。汝は同じいやうな仕事をくりかへして同じいやうに暮して、果ては死んで行くまである……』と叫んだ。Kはうなだれて深く考へ込んだ。

きなやこは

『おれは何か他に仕事を見出すことが出来ないだらうか……而して今から新しい生活を切り開いて行くことが出来なからうか……』と自分で心に問ふて見たのであつた。すると電車の走つて行つたうなり音の聞える遠方から、

『汝にそんな勇氣が果してあらうか？ そんな冒険が果して出来るか自から信じ得られやうか？ 今日までして來た仕事を止めて、明日から新しい他の仕事をなし得やうか？ そんな勇氣はない筈である。やはりかうして往き慣れた道を歩いて行くより他に道が見出されないであらう……』と嘲るやうに形の分らない男の聲は囁いた。Kは眼を上げて電車の走つて行つた方を見送つてゐると

夕暮方の都會は乳色に霞んで見えた。

三

Kは頼りなげに二たびはこやなぎの葉を見つめてゐた。今迄無心のはこやなぎに對して同情を持たうとしてゐた彼ははこやなぎから何等かの同情を得やうと思つたのであつた。しかしこれは無益であつた。たゞはこやなぎの葉は白い裏を返して何も知らぬやうな顔付をしてゐた。全く人間の生活とは無關係に風に囁き、躍つてゐるのを見た。

Kは長へに自然の無同情で、冷淡であることを知つたのである。樹木は日暮方になつたとして不安を感じる筈がなかつた。夜になつたとして宿るべき家を探ねる必要がなかつた。かうしていつまでもこのはこやなぎは此處の河岸に立つて、やがて春になれば芽を萌いて花を開いて、秋になれば自然と葉が枯れて地に落

きなやこは

ちるのを待つのである。而して幾年となくこんなやうな凋落と繁茂とがくりかへされてゐるばかりに過ぎなからう。其の間に人は生れて死んでしまふのだ  
 ……………。

ぎなやこは

Kはついにはこやなぎと自分とは無關係であると感じた。而して木に脊を向けて町の方を見渡した。黄色な色の褪めた落日の名残が電信柱の上にはんのかうすれかゝつてゐるのであつた。

秋の淋しい色のさめた夕暮ひどきの一時であるときKは口のうちでくりかへして自分の心に言つて見た。——はこやなぎの葉が風に吹かれて一片地面の上に轉つて來た。見てゐると其の葉はレールの上に止まつた。電車はすさまじい響きをたて、幾たびか其のレールの上を往來した。たとへ其の落葉が車の下に轆かれたとて何の知覺もないであらうと思はれたけれど、Kは何となく其の落葉は自分と似たところがあるやうな氣がして其の落葉の幸福を心に祈つた。たとへ枯れ

て落ちた其の一片の木の葉に知覺があつたからとて、其の葉を離れていかなるものが其の葉の心を悟り得やう。……不幸な街頭の兒の涙の味をなんで世間の人々が感じ得やう。日暮にかうして此處に立つてゐる自分の心持をなんで道を歩いてゐる人や、電車の窓から眺めて行く人々が悟り得やう。つまり自分は自分、他は他である。斯く云ふ自分だからとてやはりある人から見たら無關係の一人であらう。たとへば家もなく、餓ゑた腹を抱へてレールの上を往つたり來たりしてゐる貧しい人から見たら、其の人の心持を知り得やう筈がない路上の人であらう……電車に乗つた人々は勝手な處に行つた。また路の上には人々が勝手なことを考へて歩いてゐた。

Kはレールの間に轉つて止つたはこやなぎの葉を見返つた。而してやはり其の葉を人間の如く思つた。恰かも危険を知らずにゐる人間の如く思つた。

自分はやはり落葉のやうな人間であると思つた。寒い晩秋の暮方の空は硝子

ぎなやこは

のやうに青く澄み渡つて自分の顔が映るやうであつた。Kは暫く下を向いてレールについて歩いた。而して左側の硝子戸に赤い字で書かれた酒場へ入つた。この酒場はレール道に面してゐて電車の停留場に近かつた。Kは汚<sup>し</sup>みの出た白布のかゝつたテーブルに向つて茫然と考へ込んでゐる。テーブルの上には青い顔の女が注いで行つたウキスキイがコップの中になみくくと盛り上つてゐた。彼は何處か遠方のことを考へ込んでゐた。何かの拍子で心が現實に返つた時彼は今迄何を考へてゐたか思ひ出したけれど煙の消えたやうに空想は姿を隠してしまつた。眼を棚の上に止めると其處に女の注いで行いたウキスキイの四角な罎が置かれてあつた。棚には店頭の曇つた硝子戸を透して射し込んで來た濁つた光線がどんよりと溜つてゐるやうに見られた。而してウキスキイの罎は再び永遠の眠りに入つてゐるやうに思はれた。其他には何の外國酒もなかつた。たゞ和製の蜂印葡萄酒の罎が二本ばかり置かれてあつた。

あまり此の酒場は客がないらしいので家の裡は何となく寂然としてゐた。Kは四角なウキスキイの罎に貼られてゐる汚れのついた紙に“Scotland”の赤い文字を見詰めてゐた、……あの罎の中の酒が失なつたらもう此家にはウキスキイは無いであらう、而してまた新しい酒を買ふ心配をせなければなるまいと思つて眺めてゐた。何となく其の罎の中の酒の次第に失せて行くのは此家から樂しみの缺けて行くやうな感じがした。

## 四

いつしか日が暮れて夜になつた。風が出て來て硝子戸の鳴る音がした。船に揺られて暗い海を漂つてゐるやうな頼りない氣持がした。風の音と波の音との差別は何處にあるだらうかと考へた。頭を傾げて硝子戸を覗いたけれど眩い光りの中に音なく人の波が打つて、電車の出て行く光景が見えたばかりだ。Kは

もう一杯ウキスキイを呼んだ。

青い顔の女がまた棚の上から眠つてゐるウキスキイの罎を取り下して來た。而して中を瓦斯の光りで透して見て指頭を震はしながらコップに注いで、大事さうにまた罎を片附けた。何となく残り幾何もないウキスキイをたび／＼注がせることがなしなものゝを奪ふやうな氣がして女は訝えぬ顔付をしてゐるやうに思はれる。而して女はもう一度棚の上に罎を乗せる時に中を覗いて見てゐた。Kは微弱な反感すら起つた。この銀貨の響きとどちらが有がたいかとテールの上で鳴らして見せた。

酒場を出て外を歩いた時は雲が湧いて空が暗かつた。Kは酒の氣で顔が熱つて眼がチラ／＼とした。而して暫らく何處へ行かうかと停留場から餘程隔つて此方に來た時立止つて、足許の電車のレールに眼を注いでゐた。停留場の赤い球燈の火が、光つたレールの上に流れて血のやうに染つてゐた。而して風は寂

然として静まつた街の家根から落ちてこのレールの上を吹いて暗い河面を渡つてゐた。

Kは先刻轉つてレールの間に止つたはこやなぎの葉を思ひ出した。

死のやうな黒い色をした闇はレールの上に低く垂れて、遂に其の葉の有り場を隠してしまつた。

## 血塊

一

草深い廣野には、定つた道といふものは付いてゐないのである。さういふやうな野原を歩いてゐると、何となく物憂い感じ、あてない感じに心が鬱いで來て野原の一面が目にとゞく限り、疲れた色合であるといつてしまつた方が、此の漠然とした捕へ處のない景色を言ひ現はし得たものゝやうに思はれる。ちやうど私の此の頃の心持は、かういふやうな野原を旅してゐる心持に似てゐる。

寧ろ、心の全體がこのやうな漠然とした、疲れた野原のやうな感じがせられる。私は、自分で、このとりとめのない、いら／＼とした心持を語るのに、秩序の立つた筋などは探してゐることの出来ないやうな慌しさを覚えるのである。

たい、君がこれを読んでくれて、ちやうど草深い、空氣の蒸れた廣野を眺める時のやうに漠然として捕へ處はないながら、読み終つてしまつてから、何等かの目から拭ひ去ることの出来ない、また名の付け難いうす濁つた、汚れたやうな色彩に紙の面や、活字のラインがぼやけ、或は、虚心で自然を眺めてゐる君の心持の上に、特種の感じを投げ付ける力があるなら、其れが、即ち、私の此頃の生活の氣分である。同時に、それが私の生活が産んだ藝術であると言ひ得るであらう。考へて見たまへ君も、僕も同じい時代に産れて來た、同じい社會に人となつた青年である。これをたとへたなら、彼の物憂い、疲れてゐる廣

い野原に塲處を隔て、咲いてゐる同じい種類の赤い色の花と見ることも出来るのである。しかるに君も知る如く、其等の花の運命が同じくないやうに、吾等青年の生活は一人、一人異つてゐる。其の中の一人の私の生活が、此頃こんな風に營まれつゝあるといふことを知るのは、君にとつても興味のないことではないと思はれる。しかも、大きな自然は吾等の頭の上に掩ひ擴がつて、永遠に鼓動を打つてゐる。而して、始めあつて、終りないと言はれてゐる時も、私は、始りもなく終りもないやうに思はれる。たい、空間も、時間も、人間の思想を超越して、無限に黙々として流れてゐる。斯の如く、人間は、大きく且つ不可解な自然の中に住みながら、しかも、人間の生活がさまざまに異つてゐるといふことを知るのは、興味もあれば、また、實に一種の恐怖も其處に感ぜられるのである。

野原に咲いてゐる、一つの赤い花は、虚心に其の野原を横ぎつて行く馬蹄の

下に踏まれて、碎かれて枯れてしまふのに、其れと同じ花は、やはり日の光りに輝いて、眞夏の風に躍つてゐるのを見ることがある。人間の運命にも其れと相似てゐるものがあるであらう。其れは兎も角、私の此頃の生活にはまだ他にもいろ／＼なことがあつた。而して、私は、また、こんなやうなことを思つてゐる。其れはたゞ、何となく、君に私といふものを知つてもらひたいのである。此の世界の誰でもから、眞に自分を理解してもらふといふことは、どんなにか自分の孤獨と寂寥とを慰めるであらう。そんなやうな動機が蔭になつて、君に、この報告書のやうなものを書いて見た。若し、君が、この世界のある處に、こんな人があつて、こんな風に、此頃生活して、こんな風に考へてゐると知つてくれるなら、それで、私は、また好いやうに思はれるのである。

## 二

もう、今日で二十日許りの間といふものは、曇り勝ちな日ばかりであつた。大きな重い掌で、たへず頭を押へ付けられてゐるやうな、而して、其の巨人の生温い鼻息を吸はされてゐるやうな、蒸し暑い日がついた。いつとなしに體中が、汗にしつとりと濕つて、ちやうど生温い鹽湯に浸つて來た後のやうな氣持がした。空氣は、地面に近づくに従つて、濃く滯つてゐて搖ぎもしなかつた。たゞ、折々、太い、短い吐息のやうに熱氣を含んだ風が、中空を吹いて、重々しい衣を着た、鬱陶しさうに見える黒い森の頂きを搖るのである。私は、此の下の方の搖ぎもしない、空氣の中に坐つてゐて、室の中から茫然と木の頂きの動くのを見上げてゐると、自から氣分までが腐れて行くやうに、而して、體は疲れ果て、底の知れない眠りの谷に引き込まれて行くやうな感じがせられたのである。やはり、地上に棲息する、森の木立とて、同じいやうな、暑苦しい、厭な氣分に病んでゐると見えて、惱ましげに、枝を搖すつてゐるのであつた。



雲は厚く、濃く空に蔓つてゐて、流れるともなく頭の上を動いてゐた。而して、毎日、地上の景色は、どんよりとして見えた。ちやうど太陽がうす絹を被つてゐるやうに、雲に光線は染んで下界を憂鬱の色に包んでゐたのである。而して、私は、時々昵として道の上に立ちながら、押し黙つて空を仰いでゐると

塊 血

此の悠々とした、不可思議な大きな天體が、さながら青い胸に靈魂が宿つてゐて、何等かの意志があつて動いてゐるかと思はれたのである。天地は寂然として、何の音も聞えて來なかつた。

かういふ梅雨前後の蒸し暑い季節には、よく殺人罪が行はれるやうである。

此の社會に、突然に起るこの變調子な事件を新聞の三面には黒丸を題目の頭に付けて、毎年其頃になると、常よりも多く報知するのが事實であつた。私は、自分が突然に氣が狂つて、人を殺すといふやうなことは思はなかつたけれども自殺しないといふことを確信を以て、自ら誓ふ譯には行かなかつた。何んだか、

自分といふものが、やはり自分の意志ばかりに従つてゐるものでない。何等か背後に隠れてゐる目に見えない不可思議な力に、支配し繰られてゐるやうに思はれたからである。

幾日か大空を掩ひ、日の光りを遮つてゐた暑苦しい雲の去つて行つたのは、ちやうど鏡面に吹きかけた鼻息の曇りが、自然に消えて行くやうであつた。上を仰いで空を眺めてゐると、雲の平野が搖ぎ出して、後から、後からと雲はついで、源は容易に切れさうにも思はれなかつた。毎日、毎日、夜も、晝も、遅々として雲は流れてゐたのである。そのうちに、いつしか雲の色はうすれて、遂に、源が盡きてしまつた。而して、青い研ぎ澄したやうな眞物の眞夏の空の肌が露れて來た。空は、悠々として扁平な體を頭の上に横へてゐる。其の天體の瞳のやうに輝く太陽の光線は、鋭く矢を放つやうに、何萬千里の虚空を直下して下界に降り注いで來た。而して、地球の上に建てられた町の、いろ／＼の

形をした建物の頂きや、木立の繁つてゐる丘や、山や、また、迂り曲つて流れて行く河水の上に其の光りを投げてゐる。河の水は、赤銅色に光つて、喜ばしさうに見えた。さながら、海を自からの歸るべき家と思つて、其の道を進んで、疑はずに行くものゝやうに思はれた。陸に翻つてゐる木々の葉は、白い齒を見せて、何事か囁き合つてゐるやうである。けれど、天地は嚴肅に沈黙を守つてゐる。

私は暫らく立つて、この澄み切つてゐる大空の奥底に見入つてゐたのである。暗い色が無窮の底にあつた。而して、何となく、この暗い色は、胸に悲しみを誘つたので、ちやうど其の色が深い淵を覗いた時のやうに氣味悪かつたのである。私は、何となく、この眞夏の空の色が好きである。無限に比して極めて小さい人間は、しかも、未だ曾つて、しみじみと人生を考へるとふいやうな場合が少なかつた。青い、廣い、眞夏の空の下にたゞ一人立つて、空を見上げ

た時に、私は、始めて無窮といふことが考へられたのである。

其時、天地の間には、偶々啼いた鳥の聲と、風の音と、足許に流れてゐる水の音より何も聞えなかつたのである。人間が、町や、郊外に集つて、其處でさまじくの音を出したり、響きを上げてゐる他、天地には別に聲といふものはなかつた。而して、人間の上げてゐる其等の騒々しい音や、響きは、吾等の頭にしみじくと静かに考へさせるといふことを妨げたり、奪つたりしてゐるのである。だから、かうして私は、たゞ一人、廣い野原に来て、遙かに圓味をもつて垂れ下つてゐる空の下に立つて、遠く、高く、望み見る時、其處に人生の姿を悟り、時の去來を感じるのである。

私は、誰も通らない、眞晝の頃、野原についてゐる細い道をたゞ一人歩くのが好きである。寂然として、何の音も頭を何處にか隠してゐる世界に、たゞ獨り面白さうに、ひらひらと銀色に輝いて、あるかなしかの風に躍つてゐる木の

葉を見ると、いかにもこの黙り込んでゐる天地が、何等かの深い意味を隠して、かうしてゐるやうに思はれたのである。而して、これと同じ景色は、幾百里遠い處の故郷の野原にも見られるのだと思ふと、私は、其處に人間共通の悲哀があるものゝやうに感じたのであつた。而して、其の遠い處に住む人間の部落にも、同じく午後の次第に衰へて行く日影は、白壁の上に悲しみを帯んだ黄色味を落してゐるだらうと思はれた。

こんな風に、私は、ぼんやりとして道の上に立止つて、空しく輝やかしい空を仰いで黙想に耽つたのである。遂に、自分は、其時、自から何を考へてゐるのかさへ知らなかつた。而して、たゞ、深い、暗愁の淵に身が引き入れられて行くやうな感じがした。

この天地には、何等かの大きな不可思議な力がある。其の力は、すべての眞面目に努力する人間が感じなくてはならぬ力のやうな氣がしたのである。

かう思つた刹那に、私は、小さい自分の身のまわりに集つてゐる煩悶に對して強いて冷笑つて見たくなつた。

かういふやうに、己れは強くならなければならぬ。而して、何等か自然と人生を貫いてゐる大きな力に觸れて、確信を得、哲學を産んで、何物に對しても敏感であつて、しかも自己といふものを動かされずにゐるやうな、常に冷靜な觀察をすべて目に觸れるものゝ上に施して、其の特種な意味を理解しても、自分の胸は亂されずに、飽迄、權威ある藝術家の態度を持つて、進んで行かなければならないと考へた。其れは、此頃の青く澄み渡つた夏の空を見て考へたのである。

今日も、好い天氣である。午前七時少し過ぎたばかりなのに、朝顔の鉢のところでまで日が射し込んでもう影はなかつた。一面、庭には烈しい水銀のやうな、鋭い光澤の日光が照り付けてゐる。朝のうち、僅かの間、紫色に咲き誇つた朝

顔の大きな花が、ぐんなりと凋んで、葉まで油のやうに溶けかゝつてゐる。地面の水蒸氣は、見る間に上り盡して、小石の頂きは輝き、地肌に裂を生じて來た。殊に此日は、本年になつてない暑さだけれど、しかし空が晴れて、冴えくした青い色が心地よい。しかも、中空には、たへず風があつて、さながら、海の上を思はせるやうな日である。私は、常のやうに机に向つてゐると、いつしかまたこんなことを考へてゐる。これから先き、どんなに自分は逆境な生活を歩まうとも、迷はされるやうなことがあつてはならない。また、いかなる悲しい、苦しい事件に出遇ふやうなことがあつても、其の場合に處して、冷靜に觀察せなければならぬ。而して常に、自分は事件の渦中に捲き込まれずに離れて居らなければならぬ。古來の藝術家は、みんなかうした淋しい道を歩いて來た。自分はまた、自から藝術家であるといふ自尊心を忘れてはならないといふやうなことであつた。其れで、過去にあつたいろ／＼な事件を思ひ出して、

もう一度其の真相を探つて見る氣にもなれば、なほ過去から今日まで引きつゝいて、關係を持つてゐる事件をも、もう一度、其れを自分の體から突き放して、或る距離を隔て、すべて其等を冷靜に考へて見るやうな氣持にもなつた。

しかしさうは言ふものゝ君。其れは理窟の上で言はれるだけのことだ。私が、さういふ考へになつても、どうしても冷靜に、或る事件に對して考へることの出來ない場合がある。あまりに其の事件が生活に直接に起つて來るとか、其の事件の性質があまりに生々しいものである時には、胸に溶鐵が養え返るやうに感情が騒いで、理窟とは、全く別の行動をとる場合がある。さういふ當時には、もとより自分の心持すら、公平に批判しては筆にとれないのである。しかし、かうして自分の生活の斷片を書き、周圍を書いて君に報ずるのを見ても、私が、もう、其の事件の起りつゝあつた時分の私でないことが分る。もう、其の時分の私と、今の私との間には幾何かの距離が出來てゐる。而して、或る程度迄、

冷静に心がなつてゐるといふことは、君も、認めてくれなくてはならない。——なせ、こんなことを言はなければならぬかといふのも、あまり自分に即き過ぎた、最近の事實を書いたのだから、君に、私の藝術的氣分を疑はれはしないかと思つたからである。私は、自然界に偶然に突起しつゝある事件に對して、極めてこれを嚴肅に見てゐる。けれど、これを直ちに藝術であるとは思はない。作者の主観で、これを解釋した後には於て、其處に特種の藝術が成立つのである。

## 三

去年の暮のことである、私の妻が流産した。其の時から一月ばかり前の夜に、何か感情の衝突で私が妻を擲つたことがある。其時、妻は肩のあたりに波をうたせて泣いた。雨が降つて風のあつた晩であつた。私は、慌しく雨戸を閉めて

自分の家の様子を世間に知られまいと苦心した。其時、Hといふ友達が遊びに來たので、何もかも、其のことが知れてしまつたのである。其時、Hは二人の間を仲裁してくれた。こんなことがあつてから、私は、何となくHには其の時のことを考へると、遠慮して強いことを言はれないやうな場合もあつた。然るに、其の後である。妻の流産したのは、あれは私があつた時、彼女を擲つたのが原因だとHが、白い齒を露き出して、悪々しい笑ひをしながら言つたことがあつたが、それは全く、さうでないかと否定したのである。私にも其の原因は分らない。もとより他人にも分らう筈がない。何となれば、妻を擲つたのが原因であつたとしたならば、あまりに其の原因が、遠く隔つて前であり過ぎたやうに考へられたからである。而して、自分ではあれ位擲つたことが、さう人間の體に障りのあるものでないと思つてゐるからである。其の當時、私は、妻の妊娠してゐるのを知らなかつた。自分の一撃がどんなに女にとつて痛かつたかと

いふ位のことには想像される。私の突いたのは、腹でない胸のあたりであつた。しかし去年は諸處に非常に流産が多かつた。私は、全く氣候が原因してゐるのだらう、といふやうな漠然とした解釋をこれに施してゐたのである。其れは、いろ／＼な他の植物や、動物と同じく、人間はやはり地球の上に棲む一種の動物である。彼の動物とも植物とも分らないやうな微菌と、人間、若しくは他の動物との差は、果してどれ程だけ異つてゐるものだらうか。偶然、氣候の變化によつて生じ、また死んで行く微菌も、乃至植物も、人間も同じい自然の理に支配せられてゐるものでなからうか。流産の多い年には、何等か氣候と關係してゐるのが明かである。人類を殆んど絶滅し盡さうとするやうな猛烈な勢ひで疫病の流行するのは、微菌の繁殖と其の年の氣候とが、目に見ることは出来な

いけれども何等か密接な關係をしてゐるからであると言ふことが出来るであらう。要するにすべての生物は、等しく自然界と調和を保ちつゝある。常に人間

の體は、自然界の現象に調和し、錯誤して生死しつゝあるのである。私は、漠然とした、しかし複雑な意味で單に流産を氣候に關係してゐると言つて置きたい。私は時々、町を歩いてゐる時に大きな建物の下で立止つて、空を見て考へることがある。其の建物は、時々、私の眼に獄屋を想像させる。灰色の雲が夕暮方の空に湧いて動いて行く。私は、ふと妻の凄れた顔を眼に浮べて、且の言つた言葉を思ひ出すことがある。而して、私は自分を罪惡に汚れた人間のやうに淺ましく思ふ。しかし、自分がどうしても、腹の中に宿つてゐた子供を殺したとは思ふことが出来なかつた。妻が流産したのは、やはり氣候のせいだ、私とした仕打でなかつた。と言つて、足に力を入れて道の上を歩いて、賑かな人混みの中に自からをまぎれ込ませてしまはなければ淋しくてならなかつた。これは法律上の罪人であるばかりでない。人道の問題として、私は、迷信的に或はさうではなかつたかといふやうな空想に耽るべき場合でないから、辯解して置

かなくつてはならない。飽迄、私の擲つたのが原因になつたのでない。そんなに強く擲つた覚えがない。私は、自分の記憶を證人として言ふより途はないのだが、飽迄さう信じてゐる。殊に初め、果して彼女が妊娠してゐるかさへ分らなかつたのだから、私が流産をさせる目的で擲つたのではないのは明かだ。最初、彼女は、近所のS醫者にかゝつたけれど、やはり、明瞭に妊娠してゐるといふことが分らなかつた。此の一事だけによつて見ても、たとへ擲つた結果であつたにしたところが、其れは悪意のなかつた過失に過ぎないのである。

しかるに、或る日の午後から、妻は、非常に苦しみ始めた。顔の色が青晒めて、額には油のやうな汗が、髪の毛の生ひ際に浸んで見えた。私は、うす寒い、火の氣もない空漠とした室の中で、さも、靈肉共に、全く自分とは關係のない家族の一人の苦しむのを見てゐた。すべての動物が、盲目的に、受動的に、オルガンの破壊によつて苦しむ時の有様と、自分に最も親しい者の苦しむ有様とに、

何の變りのあらう筈がない。私は、眞に同感も出来なければ、同情も出来なかつたのを悲しくも思つた。もとより自分が責任を感じて、せめては精神上に於てだけでも苦痛を共に分たなければならぬ、流産などは知らなかつた。何か全く自分の知つたことでない他の病氣にでも妻が苦しめられてゐるやうに思つたのである。而して、其の原因が醫者にも分らない位なら、きつと重いといふ程でもないであらう。たゞ少しばかり、寒さに冒されたものであると言ふ位にしか思はれなかつた。私は、湯を沸かして湯たんぽを造つて妻に與へやうと思つた。私の家にあつた湯たんぽは青い色の陶器製のもので私共が、N町に住んでゐる頃、第二番目の兒が産れた時である。其の年の冬は、いつもの年に比べて寒かつたやうに思はれた。

私は、曇つた、風の吹く日の夕暮方家を出た。とぼくと淋しさに胸を戦かせながら、あてもなく町の方へと歩いて行つた。いろ／＼な知らぬ人が道を歩いてゐる。其等の人々は、互に顔を見向きもせずに、思ひ思ひに行く先を急いでゐる。たま／＼ちらりと互に顔を見合つたとて、直に忘れてしまふ、恐らく永久に忘れてしまふ用のない人々であつた。うす黄色く、電信柱の上の空が色づいてゐた。私は、其の空を見ながら、また兩側の店に注意しながら歩いてゐたのである。

道の交叉してゐる處に交番があつて、巡査が立つてゐた。木枯は徒らに赤い硝子の球燈を吹き晒らしてゐた。私は、交番と筋向ひの荒物屋に入つて、湯たんぽを出させて撰んでゐたのである。

私は其時のことをよく覚えてゐる。店頭に散つてゐる茶碗かなにかを包んで來た藁屑が、時々吹き込んで來る風にひら／＼と動いてゐた。湯たんぽを出し

て見せてゐる十七八の女の手には、赤い凍傷が目についたのも物淋しかつた。産れた兒供は、貧血らしくて、青白い色をしてゐた。私は、此の外界の冷酷な程、烈しい寒氣には、小さな體内を流れてゐる僅かばかりの血液の温味では、大きな殿堂を蠟燭の火で温めるやうな覺束ない感じがせられた。而して兒供は、全く此の寒氣に堪へられさうに思はれなかつた。私は、こんなことが、かうして荒物屋の店頭立つてゐる間にも頭に浮んだので、成たけ大きな湯たんぽを欲しいと言つて、荒物屋の女が、奥の方から一つ、一つ運んで來て私の眼の前に並べてゐる間にも、私の眼は其處の店に並べてあつたいろんな、乾いたやうな、廢頽したやうな色合をした器物に埃のかゝつて白つぽくなつてゐるのに、しみ／＼と心をこめて眺めてゐたのである。而して、私は、其の中で大きな湯たんぽを撰り出して買つ來たのである。思へばこんなやうに親の心配と注意によつて、何の兒も同じいやうに最も幼い日は送られた。而して、兎も角も、其



の兒は、三つになつたので、もはや、寒くなつても、一時のやうに其の寒さは怖れられはしないと思ふところから、湯たんぼの役目は終つたやうな氣がして、今年の夏の時分には、其の湯たんぼは、家内の者から邪魔物扱ひにせられてゐた。

塊 血

秋の初めであつたか、引越の時など、私は、却て車の上から轉げ落ちて破れてしまつて、役に立たなくなつてくれ、ばい、と思つて、其の運命を呪つた位である。何となれば、家であれば押入を開けるたびに目について、いろいろな連想が起つて好い氣持がしない。また賣らうと思つて屑屋に見せれば、いくらにもならないから取つてお置きになつた方がい、と言つて體よく斷るからであつた。こんな厭な思ひと冷遇とを受けて、僅かに埃の中に兎も角も壊れもせず埋つてゐた湯たんぼである。

しかるに、今、其れが押入れの隅から取り出されて私の手に載つた時に、青

い色が一種の懐しい歴史を物語るやうに、淋しく私の目に映じたのである。私は人間といふものは常に勝手なものであつて、物を言はぬものに對しては、自分の矛盾した行爲を耻とも思つてゐないものであると思はざるを得なかつた。

寒い、冬の夕暮は、年々同じい景色に見える。いつしか、とつぷりと鉛色の日は暮れて、早くから何の家も戸を閉めてしまつた。ランプの火影が、室の内を鉛色に染めてゐる。いつしか、外の木枯は吹き止んだらしい。静かな晩であつた。箆筒の傍に床を敷いて臥てゐる妻の青い顔が、ランプの光りに照らされて疲れて見えた。妻は、黙つて、眼を閉いだり開けたりしてゐたが、そのうちに、いつともなしに眼を閉ぢて、暫らくすやくと休んだ。

私は忍び足をして妻の臥てゐる傍に寄つて、顔を覗いて見た。子供のやうに眠つた時は、顔に何等の苦痛も見えなかつた。私は、湯たんぼの効きめがあつたのだと思つて、これで妻の病氣が全然、癒つてしまふかも知れないやうな希

塊 血

望が閃めいた。而して、自分も、少しばかりすやくと休んだ。

此頃の疲れてゐる私の頭は、眠つてゐても、たへず何等かの幻覺に驚いて眼が醒め易いのであつた。日中の生活の苦しみは、怖しい悪夢と化して夜も、孤獨の人々の心を襲ふのである。私は、ふと夜中に、ちよつとした物音に眼が覺されたのである。而して、暫らく耳を澄してゐると、隣室に臥てゐる妻が、床を出て便所に行つたらしい氣はひがした。私は、聲をかけやうかと思つたけれど、物憂くて口を開くのが容易でなかつた。而して、其の儘、知らぬ風をしてまた眠らうとして臉を閉ぢたけれど、だん／＼神経が冴えて來るやうで眠付かれなかつた。

『氣分は、何うだ？』

と、私は妻が便所の戸を開けて來る音がした時聲をかけた。しかし、何の返事もなかつた。

私は、それぎり黙つてゐた。しかし、心の中で妻の答へないのは、私の言つたことが耳に聞えなかつたのでない。きつと加減がよくないのであらう思つてゐた。

妻は、二たび床の中に入つたらしい。暫らく私は耳を澄まして、寂然とした隣の様子を聞き取らうとしてゐたが、彼女は眠付いたものか、それとも眼を醒してゐるものか、餘程うなり聲が聞えなくなつたので、私の心の何處かには明る日の朝になれば、もう妻は病氣が全快して、自分等といつしよに起きて勝手にも出て働くだうといふやうな、あてない希望もあつた。而して、私が、妻が病氣になつてから、毎朝のやうに獨り淋しく小供を相手として茫然と曇つた空を見て、これからの一日を思ひ鬱ぐやうな、厭な感じを心に經驗しなくても濟むやうに思つた。

まだ、夜中である。凍るやうに冷かな空氣の裡に、時計の音がやゝもすると

止りさうに聞えてゐた。しばらくしてから私は、眠付かれないので床を出て、妻の臥てゐる隣の室を覗いて見たのである。

枕を並べて二人の子供等はやす／＼と寢息を立て、時は次第に消えつゝ行くのを感じた。細目にしてあつたランプの光りは、簞笥の方を向いてゐる妻の顔によく届いてゐなかつた。顔の半分下の方は、暗く陰となつてゐる。たゞ私は、眠姿を見て病み疲れた弱々しい人間の健康の目を思ひ、死すべき日を思つたのである。何となく、不安な氣持が私の心を暗くした。

私は、黙つて簞笥の上に乗つてゐる時計を見ると既に三時前であつた。静かな裡に、時は流れて、地球は轉廻を／＼つけてゐる。恐らく、永遠に、其等のものは人間の喜憂に無關係であらう。私は、自分の床を出て、少しばかり障子の外に立つてゐたので、全身が締め付けられるやうに冷たくなつて震へてゐた。而して曉近くなるに従つて、霜が降つて、寒氣の募るのを感じた。

私は、もう眠やうと思つて、足音を立てないやうにして便所に行つた。不意に、私は、何か冷たいものを踏み付けたので、氣味悪いやら、驚きやらで、飛び退いた。而して、昵と慌てずに、マッチの置いてある場所を考へたのである。マッチは机の上のなんでも右手に乗つてゐたのが目に残つてゐる。其處で私は、汚れた足を爪立つて机の處に来て、マッチを探した。マッチは直に手に觸れたのである。私は其れを持つて椽側に出て、マッチを摺る時にも一種の好奇心を持ちながら、摺つて見ると、踏んだ物の上に光りは落ちたが、たゞ、ちらりと其のぬめり氣を持つた赤黒い物體は光つて、マッチは消えた。

また、私は、別のマッチを五六本も合せて摺つた。而して、消えぬうちに近づけて見た。赤黒いのは血塊である！

私は、急に胸を刺されるやうな氣持がした。胎兒を踏み潰したのでないかといふやうな驚きが心を捕へたからである。私は、過去に於て墮胎とか流産とか

いふことを聞いたけれど、どんなものか見たことがなかつたので、何等か白い肉體が此の赤黒い血塊の中にないかと熱心に瞳を凝らした。マッチの火は忽ち消えてしまつた。私は突然暗くなつて、二たびマッチを摺る間にも、恐怖は全身を襲つて、遂に、私は妻を呼び起した。其の聲には、押へることの出来なかつた不快と醜惡といふやうなものに對する腹立しさを禁ずることが出来なかつたのである。病み疲れたものに對するといふ考へも、醜い有様を見た刹那にはすべてのことが忘れられて、たゞ其の事を責むる感情のために毒々しい言葉を心ならずも言つたのを、後から悔いたのである。其時、妻が、床から起きて來た様子は、今から思つて見ても、さも堪へられないやうに苦しきうであつた。

私は見かねたから、湯たんぼは何うなつたと言つたら、もう冷たくなつたと答へた。而して、妻は、冷たい縁側に跪いて、私の足を汚した、血を黙つて拭

いてゐた。寒氣は、戸の隙間から犯して來た。ランプの油を吸ひ上げてゐる音がした。私は、強ひて妻の頼りない心を慰めやうと思つて、苦しいかと聞いたら、これには妻は答へなかつた。私は、縁側に、踏み潰されたまゝランプの光りを受けてゐた血塊を、黙つて其處に突立つて眺ながら、自分の片足を妻の顔の前に突き出してゐた。

妻は、丁寧に足に付いてゐる血を拭いた。而して、

『少しも知らなかつた』

と言つて、自分の行爲について羞耻と責任を感じてゐる風が憐れに思はれた。妻の持つて來て縁側に置いてゐたランプの火影が、時々、戸の隙間から洩れて來る風にちら／＼と揺れて、二人淋のしい顔に不安の影を投げてゐる。其のたびに妻の顔には、青い色と白い色がかはるがはる現はれたり、消えたりしてゐた。

明る日の朝になると、やはり妻の病氣には變りがなかつた。血塊の出たと共に痛みは止るのでないか知らんと思つてゐたのが、やはり、痛みが止らなかつた。而して、昨日の朝、私が、孤獨を感じたやうに一種の暗い、陰氣な、物淋しい氣持が心を捕へて、碌々物を言ふのも厭な感じがしたのであつた。

やはり、妻は昨日と同じいやうに床についてゐる。少しも物を食べなければ、苦しうな顔付や、様子や、其の臥てゐる室の與へる氣分にまで變りがなかつたのである。

164 雇人といつて、たゞ子供の守をする十三になる、少女が近くの町から來てゐた。この少女とて、貧しい家に生れて、九つの時から奉公口を探し歩いたので、性質のねちくれた、子供らしい優しみの見られない少女であつた。それでも、

165 妻が、病氣になつてからは、常よりも、二人の子供は、この少女に懐いたのである。

三人は、玄關の三疊で母親の苦しみも、私の氣をもんでゐる心持も、何も知らずに遊んでゐた。しかし、何となく家の中が火の消えたやうに淋しいので、自然と子供等の笑聲も聞えなかつた。

私は、書齋で、ペンを採つてゐた。けれど、何となく氣が引き立たないので、ペンが動かかなかつた。折々、氣が差して、隣の四疊半には妻が床について臥てゐると思つて、耳を澄したのであつた。而して、障子にはまつた幅の狭い硝子板を透して、外の寒い風の吹く庭には、青木の赤い實が黒ずんだ葉影に生つてゐるのが見えた。このやさしな赤い實は、他に目に止るやうな色も何もない庭にあつて目立つてゐる。而して、枯れた薄の葉が灰色の空氣のうちに、さらさらと風に鳴つてゐた。もはや四五年も経つたと思はれる古くなつた竹の垣根は、

觸れば、ぼろり／＼と壊れかゝつてゐるやうに、しかも其の疎らな目の間から、隣家の勝手許の壁板の色が見えた。其の壁板に勝手窓が明いてゐて、其れが黒く洞穴のやうになつて見えた。午前にも、午後になつても寒い風が吹いて、空の何處からか、白い鳥の温毛のやうな雪片が落ちて來た。而して、もはや日暮方に間もない頃には、覺束なげな青い烟の糸が、隣の窓からする／＼と空に上つてゐたのが、不意に吹いて來る風のためにおびやかされて、慌て、亂れて影も形も見えなくなつてしまふのであつた。

其時、私は、ペンを下に置いて縁側に出て、煙の上るのに心を送つてゐた。やがて煙が消えてしまふと、心はあてもなく地上に落ちて來た。重い愁ひに疲れたものゝ如くに、

『もう、また日が暮れるのだ。』

と思つた。私は、此時、一日太陽の光りも射さずに、蔭つてゐる庭の黒つぽい

地の上に、鹽の結晶したやうな霜柱が、地に喰ひ込んで光つて解けずにあるのを見た。毎日、毎日、しかも一日幾たびとなく見る青木の赤い實は、珊瑚の珠のやうに光澤があつた。寒さが加はるにつれて、青い雲切のした冬空の下に赤く鮮かである。しかし其の木葉は凍え死んだやうに凋れて、うす黄色くなつてゐた。私は何處を見ても、心を樂しませるものゝない、此の廣い世界を味氣なく思つたのであつた。而して踵を返して、妻の臥てゐる室の前に立つた。

『氣分は、何うだ？』

と私は、縁側に立つて障子の外から、細目の硝子板を透して内を覗きながら、箆筒の傍に臥てゐる妻の様子を見守つたのである。而して、此時、心のうちでこんなことを思ひながら、妻の運命を卜つた。若し妻が少しでも體を動かして返事をすれば、其の實、そんなに氣分は悪いのでない。幾分か妻の言ふことには誇張があるのだ。若し、少しでも體を動かさずに返辭をしたなら、全く妻の

言ふやうに甚だ氣分は悪いのだと思つたのである。私は、これを迷信とは思ひながらも、此の場合にさうトつてしまふと、腫を据ゑて妻の様子を見た。すると、妻は、少しも體を動かさずに、臥た儘呢として此方に向き直りもせずして、

『かうも、腹が痛んで困ります。』

と、我慢がし切れないやうに言つた。私は、今迄、疑ひと、空想に耽つて眼を据ゑて妻の様子を見てゐたが、急に此の憐れな者に同情せなければならぬといふやうな氣持がして、同時に、すべて夢でないと思ふと、心が慌しく騒ぎ始めて、障子を開けて中に入つた。而して、黙つて妻の傍に坐つた。もはや、ランプを點ける時刻になつてゐたけれど、それを點ける氣にもなれなかつた。誰に、この物憂い、氣持を訴へていゝか分らなかつた。どういふものか、私は、妻を憐れむより、先づ自からを憐れむ氣持が先に立つたのである。同情せよ！と心

は叫んだ。私は、眼を開いて妻の様子を見守つたのである。

日がだん／＼暗くなる頃に、妻の様子は益々苦しさうになつた。

『醫者を呼んで來やう。』

と私は、妻に向つて言つたよりは、自分にさう命じて其の座を立上つた。

## 六

私は、S醫者の處に行つたのである。私は、S醫者は三十五六の男であること聞いてゐたけれど、まだ其の人に遇つたことがなかつた。

冬の夕日は、微かに洩れて、町の上に落ちた。醫者の家は、淋しい郊外の停車場の方へつゞいてゐる往來に面して建てられてあつた。其の隣りに理髪店がある。前には、黒い札に白い字で午前八時より午後四時まで診察と書いてあるのが下がつゐた。

黄色な摺硝子のはまつた櫺の戸が閉つてゐる。私は、其れを開けて中に入ると誰もゐなかつたが、白い時計の顔が目についた。案内を頼むと代診が取り次に出た。私は、今直に醫者に來てくれるやうにと頼んだのである。

世間の人は誰でも感ずるやうに、かういふやうに此方で病人があつて頼んで行つた場合に、特別に金の取れる處でない限りは、すべての醫者とは言へないか知れないが、多くの醫者は、氣取つてもつたいぶつて見るものだ。此方が非常に氣を揉んで、しかも病人が非常な苦しみをしてゐるといふことは、同じ體でない限り、醫者に分らう筈がない。しかも、これに同情しやうとはせず、自分の虚榮心のために意地張つて見たいものと思はれる。たしか、君の叔父さんとかも醫者だと言つたことがあつたね？しかし、君の話によると、君の叔父さんは今年四十歳位で、もう頭の禿げてゐる人ださうだ。無神論者で、哲學書を愛讀してゐる人ださうだ。これだけでも私の好きな人には相違ないが、其の

叔父さんは、其様の人でない。無神論者でも自分の信仰は持つてゐられる人である。殊に貧民には施療をしてゐられる人である。世間には、廣告のために施療をする人もあるけれども、君の町での他の醫者が皆な行くのを嫌つてゐる穢多の部落にも、喜んで行かれるといふことをも君から聞いてゐる。何にも、人間に變りのある譯でない。今、其の同じい人間の一人が苦しんでゐるのを、つまらぬ感情の問題で、見殺しにするには忍びないのであらう。しかし、かういふやうに物の分つた人といふものは少ない。即ち、君の叔父さんのやうな人は、偉い人なのである。私の行つたSなどは、やはり世間の多くの醫者の中の一人である。

私は、奥へ聞きに入つた代診の出て來るのを待ち遠しく思つて、いらくしなながら待つてゐた。其の間にも、家の様子が心配でならなかつた。

代診は微笑みながら出て來た。



『今、ちやうど先生は外出なさるので、とても伺はれませんさうです。』  
と言つて斷つたのだ。

私には、直ちにこれは偽りであるといふことが思はれた。これは先方の言ひ譯としても、極めて拙いものである。何となれば、他の病人のところへ行くな  
ら、同じい其の人の診察を受けてゐる患者でないか。

『私の處は、二三丁と隔つてゐる處でないのですから、若し、他へお出かけな  
さるなら、お序にちよつとお立寄り願ひたいものです。當人は非常に苦しんで  
ゐるのですから。』

と、私は、出来るだけ先方の感情に訴へやうと思つて、言葉を丁寧にして言つ  
たのだ。

代診は、頭の上にかゝつてゐる時計を見上げた。もう、電氣燈には、いつし  
か火が點つてゐて、コスメチックで頭髪のでかくした、色の生白い脊の低い

代診の顔に青白い光りを投げてゐた。これが却つて、此男を輕薄に思はせた  
のであつた。

私の感情は、急に一種の焦立しさと憎惡とを催うして來たのだ。一層暗がり  
の顔の見ぬ處に引込んでゐて、先方が悲しさうな聲で言つたら、其れが偽り  
であつても、此の取次いだ代診其者まで憎むやうな考へはなかつたらうけれ  
ど、かうして明るい電燈の下で、てかく光つた頭髪を見たり、生白い顔付を  
見ると、此男も相談して斷つてゐるやうな氣がしてならなかつたからである。

しかし、代診は、私の言つたことが誰に聞かして見ても正當と思はれるやう  
な言ひ分を即座に斷ることが出来なかつた。其れで、兎に角もう一度奥の方へ  
入つて行つた。其の様子がいかにも迷惑さうであつた。私は、其の後姿を睨ん  
でゐた。間もなく、代診は二たび時計のかゝつてゐる下に立つた。

『もう、お約束になつた時間から、餘程遅れてゐますので、直に、急いでこれ

からお出かけになるのです。』  
と、言つた。

君、醫者といふものは、其様に此方から、こんなにしてまで頼まなければならぬものだらうか。自分の取り扱つてゐる患者に對して、人情といふものはないもんだらうか。代診が、主人を尊敬するのは至當であるが、こんなにまで、偉い人のお出かけのやうに言はれると、却つて此方が反感を抱くものである。而して、言葉を低くして頼んだものが、荒々しく理屈を言はなければならぬやうになつた。もつとも此頃は、日が暮れると寒さが募つたのである。醫者も同じい人間である上は、誰しも、炬燵にでも温つてゐたいのである。だから、醫者から見れば、此の寒い日暮方に、家を出かけるのは相當に困難であるから、其れだけの禮を拂はうか拂はぬか分らないのに、わざ／＼着物を被換へてまで出かけるのは面倒な位に思つてゐたのだらう。而して、何にも他人の苦痛は、直

接自分の苦痛でない上は、此の場合、これを躰裁よく斷はればいゝといふ位に思つてゐたのであつたらう。

七

私の頭には、此の附近に別に頼むやうな醫者のないといふことが浮んだ。このことが、私の憤りを無理にも押へ付けた。而して、代診に向つて、あなたでいゝからお出かけを願ひたいものですと言つたのである。

すると、代診の顔には、和ぎと微笑とが浮んだ。彼は、片手を形式的に頭髪に當て、また時計を見上げた。

暮れ易い冬の日は、まだ四時半で暗くなりかゝつてゐた。

『私でも、宜しければ参りませう。』

と代診は、直に仕度に取りかゝらうとした。

しかし、私には、何となく不安な念が一倍増して來た。若し誤診をされたなら何とするだらうといふやうな氣がしたのである。其れで、小さな手靴を開けてゐた代診に向つて、

塊 血

『しかし、先生に見てもらつてゐるのですから、よく容體の一應をお聞き下さつてお出を願ひます。』

と言つた。私は、何となく代診を信用し兼ねるやうな氣がしたので、敢て、こんなことを言つたのである。

私の心は、もう何者に對しても恐れてはゐなかつた。突き當る處まで行つて見やうといふ氣持になつてゐた。

『そんなことは、聞かなくても、私が、行つて見れば分ることです……いやそんなら行きますまい。誰か他の醫者になすつて下さい。』

と、忽ち代診は、私の言つたことを侮辱の意味にとつて、自尊心を傷けられ

たものゝやうに怒つた。

私は、彼が私の心持を理解せずに、何とか口實を設けて此の寒い冬の夜に出かけることの難儀を免れ得たのを喜ぶと共に、自尊心を傷けられた反感との混み合つた、複雑な刹那の心持を悟ることが出來た。自分が見れば分る……と言つた言葉には、自分の技倆をこの小さな院主以下に認められてゐるといふのを憤るよりも、代診といふものは、常に機械的に院主の命令の下に働くより能力のないものであると、世間から誤解されてゐるのに對して反抗する意味であつた。而して彼が、いつかは獨立して、醫院を建て、働く時があるといふ自尊心に對して言つた言葉に他ならなかつた。

私は、此の際、自分の言つたことはそんな意味でないといふことを、辯解するのを物憂く感じたのである。たゞもう、再び此の醫者を頼むものか。而して、來てくれないことに對して、單に、此儘では、ヒュマニテイの上より許して置

塊 血

くことが出来ないやうな気がしたのである。

私は、子供の時分に母の病氣の時であつた。ある日の夕暮方、獨り町へ醫者を迎ひにやられたことを覚えてゐる。村を出端づれると寺がある。寺のまわりに杉の林があつて、晝でも何となく暗いのである。私は、其の道を通つて町に出で、醫者の家に駆け付けると息を切らして、直に來て下さいと頼んだ。すると、頭の禿げた爺さんが取次に出て、笑ひながら黙つて頷いて見せた。私は、また、早く家へ歸つて、此のことを告げやうと思つて駈けて歸つた。しかし、歸つて來てから、いくら待つても醫者が來ないので、また迎ひにやらされたことがある。もう、其の時分には、日がばつたり暮れてしまつて、淋しい寺の横手には誰も通る姿が見えなかつた。其時、私は、小供心ながらに、親切心のない醫者を心憎く思つた。いつか自分が社會に出て、働けるやうな人になつたら今日のことを忘れんでゐて、先づ醫者の不道德を攻撃してやらなければならぬ

と思つた。其れが十數年も経つた今日になつて、私は、子供の親となつたけれども、やはり社會には同じいやうな弊風は改まつてゐなかつた。而して、私が、今このことを筆にして書いたりしたつて、やはり何の役にも立たないことが分つた。私は、今迄、學校生活をしてゐる時分には、金のことを彼れ是れ言ふものは、何となく卑しいやうな氣もしたのであるが、今になつて見れば、やはり、この社會は、到る處物質の力で動いてゐる。金の力で働いてゐるのが分つたのである。

代診と言ひ争つて、醫者の家を出ると、もう、短い此頃の冬の日はとつぷりと西に沈みかゝつてゐる。木枯の吹く空に、赤い雲が掠れて、屋根の上に引つ懸つてゐた。

其の夜のことである。私は、しみじみこの苦しい思ひをしてゐることは、到底、自分と離れてゐる友人にも、また、親戚の者にも、また兩親や、たとへ